

---

# 進藤家の人々

れおまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

進藤家の人々

### 【ZPDF】

Z0460Z

### 【作者名】

れおまる

### 【あらすじ】

【立場とオチと意味】

- ・この小説に無いもの

## 1・巽の朝（前書き）

### 人物紹介

進藤紅音… 22歳O型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考  
えるのが苦手。

進藤蒼太… 20歳大2A型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽… 17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟  
まれ氣苦労が絶えない。

進藤みどり… 16歳高1AB型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児… 10歳小4O型。三男。脳天氣で考えるのが苦手。食べ  
ることが大好き。

進藤銀太郎… 48歳AB型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説  
家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子… 46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。  
お喋りするのが好き。

1  
・異の朝

目を覚ますとまだ7時前だつた。

そして、俺が起きた瞬間に目覚まし時計が喚きだしたので、手刀で黙らせる。

一  
二  
三  
四  
・  
・  
・  
勝  
た  
ぞ！

ずっと連敗し続けたが、遂に白星を勝ち取ったんだ。

朝っぱらから満面の笑顔で制服に着替えて自分の部屋を出た。

「おひつ？」

田の前には1階へと続く無情な道が広がっている。

落ちたら無事では済まないと思い必死で体勢を立て直すが、寝起きでまだ覚醒していない体は言つ事を聞かなかつた。

「わ」の構成

そのまま階段を転がり、顔面から無事に着地した。  
いや、無事じゃなくて無様といつべきか。

「ふあああ・・・お、異派手にやつたな」

階段の上で足を投げ出して寝ていた姉ちゃんが、欠伸混じりに話しあけてくる。

・・・あなたの仕業か、俺が躓いたのは。

「寝るなら布団で寝ろって言つてるだろー。」

「あつはつはつ、悪いね。疲れちゃつて部屋に戻るの面倒でもあー

悪怯れる様子も無く寝癖でぼぼぼこなつた髪をかきながら笑つて  
いる姉ちゃん。

進藤紅音  
あかね

5人兄弟の長女にして唯一の社会人だ。

とにかく大雑把で適當で、あと大雑把。

俺は大雑把という単語を見付けると心の中で姉ちゃんと呼ぶ。  
基本的に5分以上難しい事を考えると頭がショートしてしまつ、思  
案という言葉とは無縁の姉上である。

酷い目に遭わされたものの、よく見なかつた俺も悪いのでそれ以上  
は何も言わなかつた。

「朝から騒がしいわね巽」

「あ、おはよう母さん」

「今日は早いのね。丁度ご飯出来たところだから食べなさい」

「うん」

ちょっととしたアクシデントはあつたものの、出来たての食事は美味  
しいのでやつぱりついてる。

5つ並んだ椅子の真ん中に座つて、両手を合わせた。俺の場所はい  
つもここだ。

湯気がたつているハムエッグをひとかけら口に入れたところで、姉  
ちゃんと兄貴が降りてくる。

「おはよー、兄貴」

「おはー。どうした異、おでこに痣が出来てるだ」

「ちょっとね・・・」

言葉を濁しつつ姉ちゃんを睨むと、原因を察したのか兄貴は呆れた様に笑つた。

進藤蒼太  
（しんとう そうた）

5人兄弟の2番目で長男、今年で大学2年生になる。  
それなりには喋るけどあまり口づるわけは無くて、几帳面で頼りになるのだ。

姉ちゃんすら頼りにするくらいなので、ある意味5人兄弟のトップといつてもいい。

姉ちゃんは左端、兄貴はその隣に座る。5つある椅子のそれぞれの位置だ。

別に誰がどこだと決めた訳じゃなくて、小さな頃から我が家ではこれが当たり前だった。

「おはよう、みどり」

えつ、みどり？

兄貴の言葉に首を傾げながら右に振り向くと、既にみどりが座つていた。

「お前いつからいたんだ？」

「・・・ついさっき」

みどりは目線を動かさず答える。

よく気付いたな、兄貴。いつからいたのかさっぱり気付かなかつたのに・・・

### 進藤みどり

5人兄弟の4番目で次女、今年で高校に入学した。  
兄弟の中では一番無口で表情もあまり変わらない。特技は気配を消すこと、らしいが・・・

「腹へつた～～～！」

みどりとは対照的に、あいつが朝から大きな声を上げながら階段を掛け降りてきた。

どすんどすんと床を響かせ、空いていた最後の右端の椅子に座る。

「あかねえ、そつこい、たつこい、みどねえ、おはよう！～！」

「ママが抜けてるわよ、黄児。元気がいいわね」

「やうだつた！～おはよつ母ちゃん！～」

### 進藤黄児 （じんとう ろうじ）

5人兄弟の5番目で3男、今年で小学4年生になる。

元気いっぱい一番うるさい、進藤家の太陽みたいな存在だ。  
食いしん坊で口口口口に太っている。

素直で純粋なので、家族で一番愛されているかもしれない。  
だから、屈託の無さを持ったまま大きくなると姉ちゃんとみたいにならないか心配だ・・・

「行つてきまーす」

「1」馳走様。じゃあ母さん、行つて来るね

姉ちゃんと兄貴が早々と食事を済ませて家を出ていった。

俺とみどり、黄児とは違つて出勤及び通学に時間がかかるから仕方

なこのだ。

「・・・・・・・つこてる」

「おこしこよ」れー！みどねえちゅうだいー！」

口のまわりに食べかすをいっぴい付けて朝食を頬張っている黄児。みどりに世話を焼かれているにも関わらず、食べかけのハムエッグを奪った。

まったく食い意地の張つた奴だな。自分のだけじゃなく、姉ちゃんのまで奪うなんて・・・

困った奴だが、黄児の皿をうに食べる顔を見ていると何だか癒されてしまう。

「やばい、もう時間だ」

「黄児・・・」

「まだ腹一杯になつてないぞ！――

「どんだけ食うんだよ。それくらじこひとか」

時計は8時10分前を指している。もう行く時間だ。

どんぶりに3杯田のおかわりをよれおつとする黄児を、みどりと二人がかりで玄関まで運んだ。

「じゃあ行つて来る、母さん」

「氣をつけでねー」

父さんは今日も書斎に籠もつたままか。

ちゃんと仕事をしているつて事だから、喜ぶべきだな。

普通のサラリーマンなら説教しなきやならない反社会的な行為だけだ。

高校は隣駅にあり、歩いて通える距離だった。俺とみどりはそこを通っている。

「…………」

特に自分から話し掛けっこず、みどりはただ黙々と歩いていた。別に今朝に限つた事ではなくていつもこんな感じだ。  
姉ちゃんや黄児並みに喋つたら明らかにおかしい。

もしさうなつた暁には何かが憑依したとみて目の色を確認するべきだな。

歪んだ形で願いを叶えようとすると、実体を持たない異形の存在の仕業に違いない……

「…………お兄ちゃん」

「なつ、なんだ?!」

軽い妄想に耽つていたところを呼び掛けられ、不審な声を出してしまひ。

「危ない…………」

みどりの言葉の直後、俺の体に凄まじい衝撃が襲い掛かった。  
すぐ傍にあつた壁に激突してしまう。

「ぐほおおおお……」

「いたいた、探したよみどり。はいこれ  
…………後でいいつて言つたのに」

俺を跳ねた真っ赤な車から出たのは、クソ野郎ことお姉様だつ

たのです。

で、あるいは事か相手を無視して口々口をみどりに渡しています。

「じゃあね、みどり」

「遅刻しないでね・・・」

「おいで！―せめてごめんくらい言えや―！」

「ん？あ、いたの異。さつさと学校行きなさい。学生の内から遅刻

してるんじや社会でやつてけないわよ」

「轢き逃げして悪知れないと社会人どころか人間として失格だらうが！―！」

しかし姉ちゃんは無視して走り去ってしまった。

「お兄ちゃんは強いね、車にひかれても痣だけで済むから

・・・ま、慣れてるからな」

慣れたくはないけれど、実はこうこう田に遭うのは初めてじゃない。今年だけでももう5回田だな。いずれもあの素晴らしいお姉様が加害者だ。

まったく悪気が無いのがもう、物凄い腹立つ。いくら姉であっても許せないね。

おかげで体が鍛えられてるけど、絶対に感謝なんかしないからな。

「あ、学校・・・」

校舎が見えてきた。

なんだ、結局今朝も代わり映えがしなかつたじやないか。

こんな感じで、俺の1日が始まるのだ。

（ 続 ）

## 2・みどりの好きな物

基本的に妹のみどりは少食である。

うちの兄弟はわりとよく食べる方で、特に黄児は大好きなカレーは4杯おかわりしないと食べた気がしないと言っている。

だが成長期であるにも関わらず、みどりはあまり食べない。

母さんに、黄児と胃袋を交換すればお互いに丁度いい体型になれる、と言われる程だった。

おいしいとも不味いともあまり言わないでの、兄貴である俺から見ると食事にあまり拘りが無い様に思える。

「あつ、あれはなんだ？！」

「なんだよ？」

「スキあり！貰つたぜ異、怪盗ルパン参上！」

「おいこらー！返せ！..」

晩飯時、またしてもお馬鹿な姉上様に奪われてしまつ。

それだけでも頭にくるのに、自分の好きな衣サクサクのメンチカツとあれば怒りも激しく湧いてくるというものだ。

まだ黄児であれば怒つたりはしないが、もう働いて何年も経つ大人のやる事かと思うと、悲しくて情けなくなるよ僕は。

「ぬほほほほ、勝利のメンチカツじゃー」

「やめろ！！ソースを浸すな、衣が柔らかくなるだろー！今すぐメンチカツに謝れ！」

お前をソース漬けにしてやるうか、そこの進藤紅音めーーー

俺とお前は分かり会えない。揚げ物は衣いに命、それを血ぢりふにまふにやにするとは信じられないぞ！

「人の食い物を取るなこの野蛮人！」

「ねえ蒼太、あんた彼女出来たの？今のつむけ遊んどかないと後悔するよ」

「俺を無視すんな！」の野郎、いつじてやるー。

お返しにコロッケを奪おつとしたら、箸を落とされてしまった。

「甘いな、坊や。出なおしてこいや、おつ~」

今日も騒がしい姉ちゃんと俺をよそに、みどりは黙々と箸を動かしていました。

隣の黄児に食い物を取られても、淡々と「行儀悪いよ」と注意するだけで、全く怒る様子はない。

黄児であってもしメンチカツを奪つなり、俺は本気で怒つてしまつと思う。

みどりは怒らないだけでちゃんと悪い事は注意するが、もし好きなものを奪われたら怒るのだろうか？

普段の食事でも表情を変えないみどりが好きな物。

それは・・・

「ただいまー」

「お帰り異。おやつあるわよ

椅子に座ろうとしたらい、すでにみどりがいた。

俺よりも早く帰るなんて珍しいと思ったが、今日は水曜日だから部

活は休みだったな。

「ただいま、みどり」

しかし返事どころか反応も無い。  
まあ、みどりは元からそつだな、と思いつながら座った。

テーブルに置かれていたのは、葉っぱに包まれたあのスイーツだつた。

・・・いや、スイーツって言葉は雰囲気的にちよつと似合わないかな。

みどりは、柏餅を前にしてここにひと微笑んでいた。  
好きな物を前にしてとても嬉しそうにしている。

とは言つても他人が見たら多少口角の角度が吊り上がっている程度にしか見えないかも知れない。

この表情が笑顔だと認識出来るのは、きっと家族が親しい友達だけだろう。

「・・・・・・・・・・・・

ようやく俺に気付いたのか、みどりは恥ずかしそうに口元を隠してしまった。

自分でも笑つてこるところ自覚はあるらしい。

「お、お帰りなさい、お兄ちゃん」

「ただいま、みどり」

やつぱり女の子だから甘いものは好きだよな。

でもケーキじゃなくて和菓子ってところが、なんだかみどりらしい。

みどりはそそくせと葉っぱを剥がして、スプーンで柏餅をひとかけら掬つた。

ゆっくりと口に運び、更にゆっくりと噛み締めている。

普段はただ食べ物を口に入れているという感じだけど、この時だけは違う。

「・・・・・・・・・・」

見るより食べる方が幸せだらうな。

今の表情は他人が見ても嬉しそうだと分かる。

食事は量じゃなくて質、というタイプだ。

見ていてるといつちまで幸せな気分になつていいく様な気がする。

うちの馬鹿なお姉様も少しくらいは見習つてほしによな・・・まつたく。

～～続く～～

### 3・黄児の夢（前書き）

兄弟の中で一番夢があるのは、おそれらへ黄児だ。

「世界中の国にあるプリン食べたい！」

「山より大きな口ロッケ食べたい！」

「学校のプールいっぱいに入ってるラーメン食べたい！」

などと、必ず語尾にそれがおれの夢なんだ！と皿をきりきり輝かせて言つ。

夢を見るのは自由だから、実現出来るかどうかはさておきこかにも子供らしく可愛く夢だ。

「よーしょー、お前は純粋だな黄児いー」

皆に可愛がられる体质の黄児だが、特に姉ちゃんに気に入られている。

大きなお腹を撫でるのが好きらしく、抱きよせながらいつも手でタブタブしていた。

普通、太っている子供は体に触られるのを嫌がるものだけど、黄児は姉ちゃんにだけは許してもららしく。

「もしあかねえが悪い奴にさらわれたらおれが助けるからな」

「おお、そうか。それは嬉しいねー」

「悪い奴からみんなを守りたい。それがおれの夢なんだ！」

「無理だな。黄児」

「なんでだよたつにいーおれは愛と平和を守るヒーローなんだぞー！」

「だつて・・・お前の隣にいる奴はとびっきりの悪党だぜ。人の食

い物を盗む、世界一の悪党だ」

「なんだって？！あかねえは悪い奴だったのか？！」

「これこれ異君、未来のヒーローに何を吹き込んでいるのかね」

「覚悟しろ！くらえ、タカ！トラ！バツ・・・・うわっ！」

興奮してテーブルに上がり、必殺技を繰り出そうとした黄児が勢い余つて落ちた。

「おい、大丈夫か？」

「こ、転んでもいいよ、また立ち上がるればいい。ただそれだけできれば、英雄さ！」

ヒーロー番組の主題歌の歌詞らしき言葉を口ずさみながら、起き上がった。

偉いぞ、痛いだろ？に決してそれを見せようとしたんだからな。

「あんたより打たれ強いかもね、異」

「つるさいよ怪盗ルパン」

「覚悟しろー！」

まだ立ち向かってくる黄児を宥めながら、姉ちゃんは笑っていた。日曜日の朝、起きたら珍しく姉ちゃんがもうリビングにいた。どういう風の吹き回しなのかと思つたら、黄児と格闘ゲームで対戦している。

「ちょ、ちょっとあかねえ、強いつて…やりすぎだよ、うわわわわわ！」

黄児の操る力士が、姉ちゃんの操る紅頭巾の女の子に刃でザクザク切り刻まれていた。

はは・・・日曜の朝からこいつこいつスプラッタなものは刺激が強いよな・・・

それにもしても、少しは手加減してやれよ。大人のくせして本当にろくなもんじやねえな、姉ちゃんは。

「どうした黄児。お前の力はその程度か?」

「ずるいぞあかねえ!おれ、このゲームやつた事ほとんど無いのに!」

「こりゃ、師匠と呼べと言つたはずだぞ!修行したいと頭を下げたのは誰だ!」

「うつ・・・そ、それは・・・でもさ、ゲームやつて修行になるの?」

「当たり前さ。凡人にとっては遊びであつても、達人には修行になるのだ」

相変わらず胡散臭い姉上様ですわね。

まあ姉ちゃんの真意なんて知つたことじゃないが、歳の離れた弟と遊んでやるなんて面倒見のいいところもあるのだ。あまり離れてない俺は散々な扱いだけど・・・・・

「どうだ黄児、まだ続けるのか?」

「他のゲームしようよ。おれもう飽きた」

「ふん、そうか。所詮お前のヒーローになりたいといつ夢はその程度だつたんだな」

「なんだとーー!もう1回、いや勝つまで続けるぞーー!」

「そうだ、その心構えは大切だな」

気合いを入れ直して再び姉ちゃんに挑む黄児。

その甲斐あつてか最初から姉ちゃんの操るキャラを手数で押していく。

「へえ、多少は手応えが出てきたな」

「絶対に負けないぞ！おれはヒーローになるんだ！」

・・・あんなにひた向きに頑張るのが羨ましい。

俺には何かあるのだろうか？誰にも譲れない、いわば芯となる様な物を持つているのか？

「あら～ひ、ねえ黄児？カツ丼お～じつあげるから手加減してほしいなあ」

・・・なんという情けない姉上様だ。

あいつはもう人間じゃない、虫だ。

ああはならない様にしよう。

姉ちゃんをボコボコにして氣を良くしたのか、黄児は外でトレーニングしたいとジャージに着替えた。

寒いのに良くやるな。

「頑張るな、黄児」

「うん…やつぱりヒーローなら強くならなくちゃ…走つてくんなー…」

「待つてくれ、俺も行きたい」

「ホント？分かった、一緒に走ろうつたつにー」

たまには弟の面倒を見てやるのも悪くない。

黄児といふと正直疲れるんだけど、その分元気を貰えたりするからな。

掛け合つたお氣に入りの黒いジャージに着替えて、黄児と共に家を飛び出した。

俺とは違つて夜中でも田立ちそつた、自分の名前と同じ黄色いジャージを着ている黄児。

名前も性格も明るければ好きな色も明るい、それが俺の弟だ。

「1、2、3、4つ！」

一歩ずつ走る毎にカウントしている。

太ってるのになかなかフットワークが軽いので、他人が外見だけで判断すると痛い目に遭うだろうな。

世の中には動けるデブもいるどこの有名人が言ってたが、黄児は典型的なそのタイプに間違いない。

「・・・・・！」

急に振り返り、来た道を戻り始めた。

忘れ物かと思つたが家までは戻らず、全く違うコースを走っていく。

「どうしたんだ黄児、いきなり道を変えるなんて」

「嫌なんだよ・・・あっちの家、いつも通ると犬が吠えるんだ」

「ふうん、だから急にヒターンしたわけか」

「わ、笑うなよたつにい・ヒーローにだって怖いものはあるんだぞ！」

「そりやあ、そうだな。

完璧な人間なんてもしいるなら見てみたいよ。

誰しも必ず欠点や怖いものはあるんだ。

姉ちゃんは容姿はそこそこだと思うけどあの弟を何とも思わない残念な性格。

兄貴は普段は冷静だけど酒癖が悪いところ。

俺は、良くも悪くも色々と無難だと母さんに言われた。みどりは、感情があまり表に出ないとこらかな。

「でももしその犬が悪い奴らに襲われてたらどうする？」「ちゃんと助けて、でも怖いから逃げるよ」

・・・頑張れ黄児。ヒーローになれるまでの日まで。

～～～  
続  
～～

### 3・黄児の夢

#### 人物紹介

進藤紅音…22歳O型。長女。ラーメン屋の店員。物事を細かく考  
えるのが苦手。

進藤蒼太…21歳大2A型。長男。穏やかで几帳面。酒に弱い。

進藤巽…17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。上と下に挟  
まれ氣苦労が絶えない。

進藤みどり…16歳高1AB型。次女。口数が少なく心配性。

進藤黄児…10歳小4O型。三男。脳天氣で考えるのが苦手。食べ  
ることが大好き。

進藤銀太郎…48歳AB型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。小説  
家で書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

進藤輝子…46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしてもう一本の柱。  
お喋りするのが好き。

#### 4・蒼太の変貌

兄貴はとにかくよく周囲を見ている。

「あら？お砂糖どこかしら」

「はい、母さん」

料理の途中調味料をどこに置いたのか分からなくなつた母さんを、  
せり気なくフォローしたり

「あれ？！私の携帯どこ？誰か知らない？！」

「姉さんがさつき自分でテーブルに置いてたよ」

「あ、あははは、そつかそつか、トイレに入る前に置いたんだっけ」

まだ二十代の入り口で既にボケが始まっている姉ちゃんに優しく対  
処したり

「蒼太兄さん、この問題なんだけど・・・」

「うん、これは2つの方程式を使えば解けるな」

分からぬ問題を聞きに来たみどりに、分かりやすく的確に教えた  
り、俺から見たら頼りになる人物だ。

モデルみたいな整つた顔立ちに細身の体型で、好きな青い色のシャ  
ツを見事に着こなしてしまつ。

そして誰に対しても優しく穏やかな口調で話すので、兄貴と接して  
嫌な印象を持つ様な奴はまずいない。

まさに理想の兄貴だ。

こんな立派な身内がいるのは素晴らしい事だと思つ。

しかし、あくまで素晴らしいのは進藤蒼太自身であり、別に俺の評価には繋がらないと考えると、虚しいものだ。

そんな卑屈にならなくてもいいか、はは・・・

「今日も寒いなあ・・・・・・参っちゃうね」

細長い指や美しい手を擦り合わせるその仕草・・・  
もし、もしも俺が女の子だったとしたら、異ではなく立美ちゃんだったとしたら、もう萌え死んでいたに違いない。  
いやいや、違いますよ。僕はれっきとした健全な男の子です。  
夏服の透けるブラに興奮してしまつピュアな高校2年生なんですか  
ら。

勘違いしないでいただきたいであります！

だが、神様というのは悪戯が大好きな人だ。  
それも、子供よりもずっと残酷な悪戯を好む。  
容姿端麗、文武両道な兄貴にも欠点を作つてしまつたのだ。

以前ちよこつと触れたかと思うが、完璧な人間というのはこの世に存在しない。

でも、さあ・・・・・・これは酷いだろ、なあ神様よお？あ？ああん？

「おう、蒼太。付き合つか」

「うん。いいよ姉さん」

食後のこの会話で俺を含めた全員が凍り付いた。  
お願ひだ姉ちゃん、やめて。ホントに止めてください！

姉ちゃんは家族の思いをよそに冷蔵庫から焼酎を取り出し、勢い良くテーブルに置いた。

「あ、ダメ。兄貴のグラスに注がないで、お願ひだから。

しかし兄貴は躊躇う事もなくそれを傾けた。瞬時に動きが止まり、目が座る。ああ・・・もう俺の知っている優しい兄貴はいないんだ。

「ケツケツケツケツ、いい気分だぞ〜」

兄貴は下戸なのだ。

おまけに酒癖が悪く、普段の優しい人格が眠りについてしまう。代わりにとんでもない人格が目を覚ますのだが、それは飲む度に変わるので家族である俺達ですら、直前までどうなるか分からぬ。今日は多分、良く笑いそうな感じだな。

姉ちゃんはそれが樂しいらしく、わざと酒を飲ませる。

なつ？クズだろこいつ。こういつマネして、何が樂しいんだろうな？

俺達は柱の影から様子を伺っていた。

触れたら火傷じや済まない。遠くから見守るに限る。

「おい姉さん、何か面白い話は無いのか？」

「あるよ。布団がふつとんだ、なーんつってあひゃひゃひゃひゃひゃ」

「や」

すでに姉ちゃんも出来上がりつている。

だが、兄貴はそれ以上に目が据わっていたのだ。

「何がおかしい？」

「おかしいでしょ、あひやひやひやひや。布団がふとんだんだよ  
ばーんって！」

「何がおかしいのかと聞いている！幼稚すぎるんだよお前つて奴は  
！」

「なんだとお～蒼太あ～。姉さんのギャグがつまらんだとお～」

笑っていた姉ちゃんも目が据わっている。

今すぐに焼酎のビンを割つて凶器にしてしまった程、極悪な顔  
をしていた。

2人とも会社やサークルで飲み会に誘われなくなつたとぼやいてた  
が、これでは仕方ない。

家族ですら近寄りたくないのに、同僚や友達なら尚更だろ？  
頼むからせめて楽しいお酒にしてくれよ・・・笑うのが一番だぜ、  
何にしてもな。

「・・・！」

その時、テーブルの携帯が鳴った。

あれは俺のだ。回避を優先してて、肝心な物を持つてくるのを忘れてた。

ほつとけばいいのかもしねないが、俺の周りは電話に出ないといふ  
行為を嫌がるやつが多い。  
嫌だ、友達を失いたくない・・・っ！

俺は意を決してリビングに向かう事にした。

「お兄ちゃん・・・」

「大丈夫さ、みどり。必ず生きて帰る」

「お墓に好きなゴーラかけてあげるね」

「巽、毎日メンチカツお供えするから」

「たつにい、俺もちやんとお参りするからー！」

・・・なんで生きて帰れないのが前提なの？

そりや目の前は龍と虎が睨み合つてて、飛び込む俺はウサギみたいなものだが。

いやいや気配を消せば問題ない。ほら、俺は石です。路傍の石です。

一  
異

姉ちゃんのドスの利いた声に震え上がり、足が竦んだ。  
手を伸ばせばそこに携帯があるので身動き出来なくなつた。

酒が悪いんだ。

「なに?」

呼んだけ

そういうと姉ちゃんは笑い転げた。

椅子から落ちても腹を抱えて笑っている。

さつさと携帯を取つて逃げよ。長居は無用だ。

「異」

しかし、もう一匹の猛獸が優しく声をかけてきた。

「ど」へ行くんだあ～

「うわああああああ～？」

やめる、抱き付くな～うわつ酒臭い、やめる～。  
せっかく携帯を手にできたのにこれじゃ・・・！  
まだ鳴り続ける、こうなればこのまま出てやるだ。

「・・・・・！」

・・・切れた・・・

呼応するかの様に、俺の体から力が抜けていった。  
もうどうでもいいや・・・

「おやすみ」

兄貴は抱きついたまま寝てしまった。

俺は酒なんか飲まない。

～～続く～～

## 5・紅音の長所

人間、誰しも長所のひとつくらいはあるものだ。  
光があれば影がある様に、欠点があれば長所もある。

・・・うちのお姉様を除いては、な。

ていうかこの人のいいところって何? 真面目に聞きたい。

兄貴は人当たりが良く優しい」ところ、みどりは物静かで一緒にいる  
と気を使わなくて済むところ

そして黄児は底無しの明るさがあって、見ると自然に癒されると  
ころ・・・

母さんは料理が上手だし俺達兄弟の好みに合わせた完璧な味付けが  
できる。

父さんはみどりに負けない位静かだが、人を笑わせるのが好きらし  
く少ない会話でも小ボケを挟むから話して面白い。

でもこのク、いやいや素晴らしいお姉様にはいいところなんか何一  
つありはしないと思づ。

ここ数日の行動を見ても朝っぱらから俺を階段から落とす、それから車でひくけど氣付かない、

俺の大好きな食べ物を奪う、黄児にゲームで勝てないから食べ物で  
釣る、

そして酒に弱い兄貴を酔わせて楽しむ・・・

裁かれるべき悪業の数々、神様が許してもこの俺は許せない。

なんだか良くなきが姉ちゃんはやたらと俺ばかり標的にする

のだ。

黄児は溺愛といつてもいいくらい休みの日は可愛がつてゐし、俺と年が近いみどりも同じくらゐ遊んでゐる。

兄貴は、たまに酒を飲ませたりするが基本的には仲が良い。

俺だけだよ・・・・・

なんでそうなの？ねえどうしてなの？

兄貴やみどり、黄児を車で跳ねないのはどうして？いや、跳ねてほしい訳では無い。俺を跳ねないでほしいの。

俺、姉ちゃんになんかやつたわけ？なあどうしてだ。

・・・面と向かつて聞けたら楽だらうな。

聞いたらますます面白がつて悪戯がエスカレートしそうだから、怖くて聞けない。

そうだよ、俺は弱虫だ。だから仕方ないじゃないか。

「・・・・・戻るか」

朝の散歩に出かけたがやつぱりもやもやする。

それに、寒い。12月だから当たり前だけど、真冬にはまだ早いのに。

今からこんなだつたら本番はどうなつてしまつんだ？

家に戻るともう8時だつたが母さん以外は誰も起きてなかつた。軽く挨拶の会釈を済ませ、自分の部屋に戻る。

「最悪～～～～！～」

そしたら人のベッドに寝てやんの、あいつが。何してんのこの人？なんで自分の部屋で寝ないの？やめてくれ・・・真冬なのにTシャツにパンツだけという、防寒も

へつたくれも無いスタイルで寝るのさ。

「…………」「

馬鹿姉は俺に気付き、顔を上げた。

瞼が微かに開きかけていたが、すぐにまた眠りに落ちる。

「邪魔すんなよ、寝たいからあっち行け」

「…………」「

「無視すんな……」「

すると姉ちゃんはめんどくさうに尻を持ち上げた。  
「、この体勢は、やばい。今すぐに逃げなくては！」

“ぶう～～～～～～～～～～、プスツ”

し・・・・・しまった・・・・やられた・・・

しかも間延びしたくせに、歯切れが悪く最後に小さく途切れたのが  
余計にむかつく。

いやあ頭にくるね。返事をいつこう形でされるつてのは。  
まるでお前が出ていけと言わんばかりの行動だな。

うわあこれは酷い。

毒ガスが俺の部屋に充満してゐる。

「窓開けるなよ、寒いでしょ」

「嫌なら原因を作るな。この悪臭女」

「そりゃあんたでしょ。汗臭いわねこのベッド」

「だったら自分のところで寝る。早く出でていってくれ」

「疲れてんの～・・・異の部屋、日当たり良くてあつたかいんだも

ん・・・

暖を求めているのか。だつたら厚着して寝る。

まったく、いつまで人の部屋に来るつもりなんだよ・・・。もう俺は高校生なんだし、普通の姉弟なら自然に壁が出来るはずだ。だが姉ちゃんはそんなお構い無しだ。

下手すれば未だに一緒に風呂に入ろうとするかもしない。仲が良いにこした事は無いが、多少の線引きみたいなのはなればおかしいよな。

とにかく、姉ちゃんといふとそれだけで疲れちまつ。

でも他のみんなはあまり嫌がる素振りは無いんだよな・・・。やたらと家中で姉ちゃんは家族に呼ばれる事が多い。

そういうや、いつも誰かしらと一緒にいる事が多い様な・・・。

「巽いー」

寝呆け眼で姉ちゃんは俺を呼んでいる。

なにをにやにやしてんんだ、キモチ悪い奴だな。

でも何故か、理由は無いんだけど近くに行きたくなつて近付いた。やられたらやり返せる様に警戒していたが、あつさり捕まってしまう。

カメレオンか食虫植物に捕まるハエもこんな気分なのかな。そのカメレオンか食虫植物は、闇延びした屁をいくつだらうか?

「は、離せ!」

「んーーー、やつぱり巽はあつたかーい」

まるで抱き枕みたいに俺を締め上げる姉ちゃん。  
あ、頭に血が昇ってる・・・苦しい・・・やめひ・・・!

「離せえ・・・姉ちゃん、やめろおおおーー！」

「いやだ。下手な布団や毛布よりあつたかいんだもん」

何が哀しくて日曜日の朝からこんな日に遭わなくてはならないんだ？  
俺はいい歳した姉ちゃんに抱き付かれて喜ぶ趣味なんて無いぞ。

「ねえ、巽」

「・・・・・・・・・・・・

息がかかる距離にある、姉ちゃんの顔。  
寝起きだから当然化粧なんかしてないんだけど、肌は綺麗で眉毛も

しつかり残っている。

「覚えてる？ あんたがちっかりこ頃はよくひつしてたんだよ  
「いつの話だ・・・」

「覚えてないか。そもそもウソだし」

「呼吸するみたいに出任せを言つくな！」

「それも出任せ。さあ、どうひだりねえー・・・・

「おい、姉ちゃん？！」

・・・・・・また寝ちゃった。

おいおい、せめて腕はほどいてから寝ろよな。

そういうや姉ちゃんの長所って結局なんだつたんだろう・・・?  
しいて言つなら不思議と周りに人が寄つてくるところ、だろうか。  
ん？ なに、無理矢理まとめた感じがする？  
ああ・・・聞こえない・・・  
あーあー・・・聞きたくない・・・

なんだか眠くなってきたぞ。姉ちゃんの眠気が伝染したか。

いつもに比べたら今日の姉ちゃんはまだましな方だな。

じゅ、おやすみ。

続  
く

## 6・輝子、英雄

どんな相手にも怯まない人って、周りに1人はいるでしょ？

俺の場合は母さんがそれに該当する。

姉ちゃんも大概は物怖じしないんだけど、さすがに怖い人種くらいはいるのだ。

それが、今日の前でくちやくちやと咀嚼しながら俺を齧している、明らかに堅気では無い風貌のおじや・・・お兄様です。

「あの、だから、うちはもう間に合つてないって・・・」

「いいから取つてくれよ新聞。それくらいの余裕あんだろ？」

全く話の通じない御方だ。

誰もいない時を狙つてくるなんて、まるで空巣みたいなヤク・・・  
おじさんだな。

姉ちゃんはまだ店だし、兄貴達も学校だ。  
もしいたら数で対抗できたかもしけない。少なくとも俺一人よりは  
善戦できたかも・・・

しかし、見事に絵に書いた様なヤクザだな。

パンチパームに顔につぎはぎの跡、白いジャケットにラメの敷き詰  
められた趣味の悪いシャツ・・・・・・

お願い、誰か助けて。

俺だけじゃ無理かも・・・いや、絶対に無理。

「じゃあ気が変わるまで待たせてもらおうかな」

「ちょ、ちょっと一勝手に入らないでくれよー」

ああ・・・怖い。泣きそづだ。

誰か俺を助けてくれ。不幸から守つて・・・

「何か」用ですか？」

き、來た。

・・・・・　來たああああああああああああーー！

これ以上無い援軍が來たぞーー！

「ああん？なんだてめえは」

「初めまして。私はこの子の母親、進藤輝子（ハナコ）と申します」

母さんはパンパンに膨れた買い物袋を両手に掲げたまま、礼儀正しく頭を下げた。

どんな相手にも別け隔てなく自己紹介するのは母さんのいいところ、なのが?

でも、分かる。

笑顔の下に強烈なオーラを潛ませているのが・・・

可哀想だなこのヤクザさん。行動次第だけど、恐らく94パーセントの確率で泣いちゃうかも。

「か、母さん」

「心配ないわ巽。お腹空いてるでしょ?、すぐに終わらせてあげる「そうじやなくて、程々に・・・入院させちやダメだぞ?」

・・・怖い。

笑顔で頷くのが怖いです。

「ナニを！」わや「こちやほぞいてんだババア。クラすぞ！！」

「あなたの様な用件でうちにおりでになられたのですか？」

「そんな事はどうでもいい！…しねつ！」

ああ、しぬよ。

あなたがね・・・・・・

俺は物陰に隠れながら試合の成り行きを見守る事にした。

ROUND1、ファイツ！！

まあ2は無いだろつけど。

「オラアアアアアアー！」

力任せたナックルに腰を反らせて、寸前で躊躇母さん。  
すかさずその手を取り、素早く体を反転させて背中に相手を負い込んだ。

「ぬおおおおおおおお？！」

恐らく体重が倍は重い相手を軽がると投げ飛ばしてしまった。  
地面に叩きつけたヤクザの首元に右足をカミソリみたいに近付けた。

「まだ続けますか？」

「舐めるなこのババア！！」

あ・・・また言った。

一瞬母さんの目付きが鋭くなつたのを、俺は見逃さなかつた。ヤクザは起き上がり突進を仕掛けた。

それも軽いステップで躊躇し、相手の腿の裏に鋭い蹴りを放つ母さん。自分から攻めるのではなく主にカウンター主体でのスタイルは健在だつた。

仮面のヒーローで例えるなら、飛んでくる赤いカブトムシをベルトに装着して変身するあの人人に近い。

「あなたの罪は全部で3つあります」

「な、なんだと・・・?！」

「ひとつ・・・初対面の人に悪口を言つた事。

ふたつ・・・お口が下水道の様な臭いがする事」

ああ、失礼だなそれは。

歯ぐらいはきちんと磨かなくちゃね。

「みつつ・・・私の子供を怖がらせた事。最初の2つはこれに比べたら、無罪に等しい！」

か、母ちゃん・・・

そんなに自分の子供の事を・・・・・・

「知つた事かあああ！！新聞取れやああああああーー！」

尚も突進してくるヤクザの腹に、正拳突きをたたき込む母さん。激痛に硬直している相手の前で右足に力を込めた。

数秒の間の後、必殺技の回し蹴りを放つ。

「ぬおおおおおおおっ！」

ヤクザはまるでトラックに跳ねられたかの様に吹き飛び、そのまま道路に崩れ落ちた。

「大丈夫？」

「う・・・うん・・・」

いくら母さんと分かつていても、実際にあの力を田の当たりにしたら怖いものは怖いのだ。

もし侵略者が攻めてきたとしても母さんがいれば我が家は大丈夫だるうな。

こうじうジャンルじゃなくてアクション物に転送されても、立派にやつていけそうだ。

俺は無理だな。こういうグダグダ系の話のキャラクターで良かつたと心から思つ。

「向こうもお仕事だから仕方ないけどね。でも、高校生を脅すのは良くないと思うわ」

「今時あんなヤクザいるんだな。驚いたよ」

2つある買い物袋をひとつ一度手に持つたけど、重そうだったので代わりに持つてあげた。

確かに重いけどそれほどでも無い。

あんなヤクザを軽々と退治してしまったにも関わらず、これが重いなんて・・・

やっぱり母さんも女性なんだな、と思った。そして、女性であり俺たちの母親なんだと、妙に安心してしまった。

「・・・・・　ただいま」

「たつにい、母ちゃん、ただいまーー！」

そこに丁度みどりと黄児が帰ってきた。  
キッチンに並んだ大量の野菜や肉を見て、黄児は目を輝かせている。

「今日の晩飯なに？！」

「黄児の好きなカレー鍋よ」

「やつたあーー！」

野菜を切るのを手伝っている俺やみどりをよそに、無邪気にはしゃいでいた。

「母ちゃん、おれ今日学校でさ、友達いじめてる悪い奴がいたからやつつけたーー！」

「あら、よくやつたわね。でも無闇に相手を叩いちゃダメよ。力は大切な人を傷つけられた時にしか使っちゃいけないの」

「大丈夫！！怒鳴つただけだからーーでも、また来たらやつつけやるーー！」

・・・黄児はまだ知らないよな。

母さんもヒーローだつて事を。

お前もいつか家族が出来たら、母さんみたいな立派な人になるのかな。

でもまだまだ先の話だよな。

未来のヒーローは、好物を楽しみに待っていた。

（～続く～）

## 7・銀太郎はポケ好き

父さんは小説家だ。

大学を出て10年サラリーマンをした後に会社を辞めて「デビュー」した、らしい。

もう15年目なので、俺が物心ついた時には既に小説家だった。デビューの年は姉ちゃんと兄貴は小学生で、俺はまだ2歳、みどりはまだ1歳だった。

そして、黄児はまだ生まれてない。

本を全然読まない俺でも、小説を書くのが大変だってのは何となく分かる。

小さな頃から書斎に籠もりつきりの父さんを見てきたから、本を生み出す為は時間が必要なんだと分かるのかもしれない。

それにもしても、仕事とはいえ何日も部屋から出ないなんて凄いよな。俺だったら脱走するね。間違いなく耐えられない。

「あつ」

「おう、異か」

学校から帰った後、2階に上がつたら部屋から出てきた父さんと鉢合わせた。

「仕事終わったの?」

「一段落つてとこだな。全体で八割だ」

「あと少しだね」

「頭の中ではな」

「つて妄想かよ!」

思わず突つこんでしまった俺を、嬉しそうに見ている父さん。  
いつもこりうだ、父さんは余話の中に毎回小ボケを挟むからな。  
1週間の内でお話す機会はあんまり無いけど、余りとほほ毎回こんな  
感じだ。

「異、ちょっと付き合ひてくれないか」

「いいよ」

「ではまず文通から始めようかな」

「今時文通かよーしかも自分から誘つとして奥手だなー」

「お前は優しいな。みどりにいつも軽く流されてしまうから寂しい  
んだ」

みどりはあまりこいついうキャッチボールは得意じゃないからな。ボ  
ケをかます相手としては適切ではないと思つ。

「今日はどこに行くんだ?」

「風の吹くまま気の向くまま、好きな場所に行きたい」

「ふうーん、つまり決めてないんだね」

「まあそう言つな。ジョギングというのは決めたコースだけでは飽  
きてしまうのだぞ」

・・・今のはボケじゃなかつたのか。いつもの癖で突つこんでしま  
つた。

シルバーのジャージを着た父さんと並んで、土手を自転車で走る。  
父さんはスキンヘッドでメタボ体型といつかつい見た目なので怖  
く見られがちだ。

中身を知つていれば別に怖くないんだけど。

健康の為に空いた時間はこいつしてジョギングしている。

本当は毎日続けたいと言つてたけど、仕事柄なかなか時間が取れな

いのだ。

体型のわりに速く走るのは、もう何年も続けているからだひづな。

「どうだ異、父さんは速いだひづ」

「ああ、追いつくの大変だよ」

「空気抵抗ゼロだからな」

頭を誇らしげに撫でながら顔を決めたので、思わず笑ってしまった。体の特徴を自ら笑いのネタに出来るのは凄いと思つ。

丁度夕方という時刻のせいか部活中の中学生や会社帰りしきりハソナー達とすれ違つ。

「・・・・・・・・」

別にただの思いつきで、そんなに深く考えたんじゃない。  
もし父さんが小説家にならずカラリーマンだったら、どうなつてた  
だろつ。

きっと朝早くて夜遅いだろつから、顔を合わせる事が無いのは変わらぬにかな?

日々の仕事に疲れて小ボケを言つ余裕も無いだろつか。

それはそれでいいかもしない。正直、毎回突つこむのは辛かつたりする。

「どうした異、田線が明後日の方角に向いてたぞ」

「えつ・・・・そ、そうか?」

当たらずとも遠からず、つてといだな。

ある意味違つ未来を想像してたんだから。

「父さんがメタボじやなくなつたりどつなるのかな、つて思つてた  
んだ」

「ただのおっさんだな」

「小説家だろ？」

「つむ、そつだな。そしてお前達の父親だ」

当たり前の事かもしれない。

でも、なんだかとても大事な事を言つた気がする。

「小説家・進藤銀太郎である前に、俺は輝子の夫であり5人兄弟の  
父親だ」

なんだか、父さんの口から聞くとそれが大事な気がしてきた。  
でも恥ずかしい。突然こんな話題を切り出すなんてどうしたんだろう。

・・・まさか父さんは重病を隠していて、息子にそれを打ち明ける  
とか？

何となく辻褄が合つた。

だからいきなり自分は父親だなんて言い出したんだ。今のうちに言  
つておきたいなんて・・・

「巽」

「父さん！病気になんか負けるな！」

「・・・・・・レベルの高いボケをかましたな。なんなんだいきな  
り」

「だつてタイミング的におかしいよー日常的な場面でいきなり、自  
分は父親だなんて」

「おかしな奴だな、お前は。なんで不安になる必要があるのだ」

そ、それは・・・・・・

何ででしょうね？俺もこきなり不安になつてきたもんで、さっぱり分かりません。

この話の事だから多分今回の出来事が伏線になるとか、まず無むやうだな。

いけない、一応主人公的な役割を担うこの俺が、自分の出る話の内容がどんなのか把握出来てないなんて・・・・・・

まあ書いてる人がその回の内容すら考えてないから、俺はただ踊らされるだけだな。

「良かつた、まさかシッコリのお前にボケ氣質が宿つていたとは思わなかつたがな」

「はい？」

「紅音がいい素質を持つてると思つてたんだが、あいつは天然氣味だからな。兄弟の中ではお前しかいない、今のところは」

「そうなの・・・・」

うまい突つこみが出来ない。

いつものボケ、いや小ボケだつたら反射的に返せるんだけど。

こつちも急に不安になつたから聞いたのであって、あまり素質があるとか言つてほしくないな。

そういひじてこるうちに折り返し地元を過ぎていった。

「しかし驚いたな、いきなり病氣がどひどひ出て出したから  
「もういこつてその話は」

余程面白かったのか、父さんは珍しくいつもより饒舌だった。  
あまり言われるのは好きじゃないけど、笑ってくれたならいいかな。

「ふう、今日は良くなっただな」

「もう真っ暗だ、早く帰らないと」

今日は久々に父さんの笑顔を見た。

時折発言の意図が見えないけど、別にいいか。

この人がいなかつたら俺は、俺達は生まれてないんだから -

だから笑ってくれ父さん。

何事も笑顔が一番だ。

～～続く～～

えっと・・・」、今日は私が語り手を勤めます。あんまり喋るのは得意じゃないんですけど、頑張ります。

あつ、名前言わないと分からぬですよな。進藤みどりです。5人兄弟の4番目、下から数えた方が早いです。

成績じゃなくて年齢です。でも、そういう言い方はおかしいかな。一体何が早いのか分からぬし・・・

今日はお兄ちゃんの話らしいので、私がいづして話します。あつ、話してると言つても実際に口に出してるんじやなくて、思つた事が文字になつてるとこが正しいかな・・・

「めんなさい、相手に伝えるのが苦手なんです。

それで今日はあの人を紹介します。

姉さんや蒼太兄さん、黄児と比べたら普通の人・・・お兄ちゃん、進藤異です。

普通つていうか、お母さん曰く無難らしいです。

うるさい、いや賑やかなお姉ちゃんよりもつるせこ黄児に比べたら確かに普通です。

今日は久々に兄弟揃つての外食です。

外に行くとの2人は家以上につるせこで、周りのお客さんに迷惑をかけてしまう事はよくあります。

そのせいか、お兄ちゃんは騒ぎません。

でも静かな蒼太兄さんや、無口な私よりは喋ります。少なくともその場が気まずくなる事は無いでしょう。だから、そういう意味では無難な人なんです。

そして服装も・・・

「なんだみどり？俺の顔に何かついてるか？」

「・・・普通」

「えつ？聞こえない」

目立ちやすい暖色系の赤のお姉ちゃん、黄色の黄児  
逆に落ち着いた寒色系の青の蒼太兄さん、緑色の私  
そしてお兄ちゃんは黒。よく街でも黒い服着てる人見かけますよね  
？お兄ちゃんも沢山いる中の1人なんです。

別に変じやない、でもいっぱいあるから目立つ事もない。だから無難です。

「変な奴だな、兄貴の服なんかじつと見てるなんて  
「目立たないなあ」といつ、って思つてんでしょう」

お姉ちゃんに心の中を見透かされたと思つてしまひもどりになつた。  
い、いやいや、お兄ちゃんをそんなふうに思つのは・・・失礼だか  
ら・・・

気を取り直して席に座ります。

お姉ちゃんは黄児を隣に座らせて、私達3人は向かいに座りました。

「黄児、何にする？」

「ハンバーグカレー大盛り！..あとレモンステーキ！..」

「じゃあ私はチゲ鍋」

「姉さん止めといった方がいいんじゃない？この間もそれでお腹壊しましたでしょ」

「次は負けない！」これは私とチゲ鍋の真剣勝負よ」

私も蒼太兄さんと同意見です。

あの時30分近くもトライで唸つてたのに、また食べるなんて無謀もいいところ。

辛いのダメなぐせに食べたがるんだよね・・・姉さん。

「そつか、本気なんだね。俺はシーザーサラダとコンソメスープにしどくよ」

「それだけ？あんたもしかして馬？」

「昨日友達と食事して食べ過ぎたからね・・・姉さん、馬の顔真似はやめてほしいな」

あまり食べない私でも蒼太兄さんは少ないと思つたら、そういう理由があつた。

「私はグラタン」

最後はお兄ちゃん。

「俺はカルボナーラにする」

・・・・・普通だ。

いたつて普通だ、お兄ちゃんは。

「何だよみどり、俺なんか変なものでも頼んだか？」

「うつ、うつん、何でもない」

「面白味のないもの頼んだって思つてんでしょう」

「違う・・・・・」

「姉ちゃんみたいに腹弱いのに辛いもの頼むアホよりはましだと思うがな」

「つるさいこのボケ！罰として来たら半分食えよ！」

「最初から頼りにするつもりだったんじゃねえか！」

黄児みたいに大盛りでもなくて、お姉ちゃんみたいに冒険しない。  
蒼太兄さんみたいに特に体を気遣う訳でもない、あくまで普通。

「人生は一度きり、楽しんだヤツが勝つのかよ」

「おい・・・やめろつてば、姉ちゃん。まじで・・・」「

ぐつぐつ煮立つている真っ赤なチゲ鍋に、タバスコと胡椒を一刀流  
で投入していくお姉ちゃん。

お兄ちゃんも蒼太兄さんも私も、そして黄児までも顔が引きつって  
いた。

「飲食業で働いてる奴のする事じゃねえぞ。なあ黄児、食い物で遊  
んじゃダメだからな」

「もぐもぐもぐ・・・えつ、たつにいなんか言つた?」

結局、お姉ちゃんは今回も負けた。

何とか完食はしたものの顔は汗まみれになり、早速お腹が悲鳴をあげ始めたんです。

なので蒼太兄さんが運転を代わる羽目になりました・・・

「だから言つたんだこの間抜け。腹が弱いんだからもうやめとけつ  
て」

「ふつ・・・簡単に勝てる様な勝負なら最初から挑まないわ。いた  
た・・・蒼太、優しく運転してくんない?」

「いいけど、ゆっくり走つても大丈夫か?」

「・・・急いで。私の精神力は長くは保たない」

周りからやめると言われたらやりたくない。それがお姉ちゃんです。  
昔から無茶ばかりしてきたのですが、三つ子の魂なんとやらで今まで

も変わってません。

助手席で苦悶の表情を浮かべながら蹲つています。

そんなお姉ちゃんを、お兄ちゃんは心配そうに見ていました。

よくお姉ちゃんにつっこみを入れたりしてるので、なんだかんだで一番話しているのは多分お兄ちゃんじゃないかな、と思います。

お姉ちゃんも、心なしかお兄ちゃんと話す時は生き生きしている様に見えます。

「兄貴、胃薬つてリビングのテーブルにあったよな

「ん・・・ああ、確かにそうだったな」

呆れている私や満腹で他の事が頭に無い黄児をよそへ、お兄ちゃんはちやんとお姉ちゃんを心配しています。

無難で普通だけど、お兄ちゃんは優しいんだな・・・

「何だよ、みどり。なんか今日やたらと顔見すげじゃねえのか

「や、そり? 気のせいだよ・・・・・・」

「お前今笑つてたぞ。変なこと考えてたり」

「半分食べてあげればお姉ちゃんは苦しまなかつたのに、こいつは悪魔だ。どうだみどり、お前の心を読んだやつだぜ」

俗に言つゞや顔を向けてくるお姉ちゃん。

「ハズレ。お姉さんの部分だけ正解」

「なるほど、当たりか。あたたたた、ちょっと蒼太、優しく運転してよ~」

みなさん、お兄ちゃんのこと少しは分かりましたか?

歳が近いの話しやすいんです。機会があればまた・・・それじゃ。

～～続く～

## 9・紅音、風邪をひく

「無理しない方がいいんじゃない紅音」

「平氣だつて。これくらいで休んでらんないよ」

あぐびしながら降りてくると丁度姉ちゃんと鉢合わせた。  
なんだか鼻声だな、もしかして風邪でもひいたのか?  
そういうや昨日トイレに籠城した後、胃薬飲まず遊びに行つてたな。  
ちゃんと飲んどけつていつたのに、俺や兄貴の忠告をなんだと思つてるんだろう。

まったく、社会人のくせに自己管理も出来ないのか?

腹痛を拗らせて風邪ひくなんて馬鹿馬鹿しそざるよ。

「遅いぞ異、こないだは早かつたのにどうした」

「人のこととやかく言えるのかよ姉ちゃん。腹痛いのに遊びに行くからそんな声になるんだ」

「馬鹿、チゲ鍋はパワーの源よ。食べる前からじょつと風邪気味だつたの。寧ろ良くなつたと思つけど」

・・・あくまで自分のミスは認めない、か。

別に押し付けてるつもりはないけど、これでもちゃんと気遣つてんだから少しくらいには聞いてくれたつていいのに。

まあ昔からそうだったからな、今更変えられる訳ないか。

風邪引いても落ち着きが無いから平氣で歩き回るし、それで兄貴も俺も伝染させられた回数は数えるのが面倒臭いほどある。

「んじゃ、行つてきまーす」

「いってー」

ポン、と俺の胸を押して「やにやしながらいつた姉ちゃん。

まるで、心配いらない、なんて言いたげな顔をしながら。

姉ちゃんは無茶ばかりするくせに体はあんまり強くないから、多分今日は早退するだろ？

その逆で、黄児は生まれてからまだ一度も病気らしい病気を患っていない。

冬でも長袖を着るのを嫌がるくらいの健康優良児だ。

家族の中では父さんに次いで寒さに強い。体型も同じだからだろうか。

見た目の割りに動きが機敏なところも似ている。

姉ちゃんも、体の強さを持っていたら良かつたのに・・・

別に心配なんかしていいない。

風邪の時も普段と変わらず鬱陶しいから、それが嫌なだけ。だから勘違いしないでほしいね。俺は別に心配なんかしていないのだ。

学校から帰ると、姉ちゃんのブーツがあつた。  
やっぱりな・・・・・自分の不始末で職場に迷惑かけるとか、ダメな人だ。

よく俺に社会人がどうたらいいつたらと偉そうに言つてしまふ、何をしている。

「お帰り巽」

丁度母さんがお粥を運ぼうとしていたので、代わりに持つていく事にした。

「いいの？宿題は」

「今日は無い。それに、軽く説教してやりたいんだ」

全くあの姉ちゃんときたらどうしようも無いな。

乱暴にノックして部屋に踏み込むと、どうしようも無い人がベッドにへたり込んでいた。

「…………異？」

顔はリンゴみたいに真っ赤になつていて、濡らしたタオルを額に乗せている。

弱つてじる姿を田の井当たりにして、どんな言葉をかけていいのか迷ってしまう。

「あ、お粥持つててくれたんだ。サンキュー」

声も朝よりかすんでいる。

色々と言つてやりたい事はあつたけど、病人を前にしたらそんなものは吹き飛んでしまった。

今年だけで数えても今回が初めてではなく、確か2回目だったと思う。

「し、仕事はどうしたんだ」

「無理しなくていいって言われた。今日はひと人少ないからやったかったけど」

どうやら、自分で早退したいと願い出た訳じゃないらしい。

諦める時はあつさりしているあの姉ちゃんも、仕事に関してはそうじゃないんだな。

まあ当たり前か。社会人ならば、な。姉ちゃんの言葉を借りるけど。

「異」

「なんだよ

「…………」

口を開けて指差してくる。

「虫歯でもあるのか

「違うよ。自分で食べるの面倒だから」

えつ？

食わせろって？！

なつ、なんでそこまでしなきゃなんないんだよー！  
やめてくれ恥ずかしい。俺もつ高2だぞ？！

「嫌だな、そんな露骨に拒否する顔しなくてもいいだり  
「か、母さんに頼んでくれよ。恥ずかしくて出来ないって」  
「いいでしょ、別にパジャマ取り替えとか体の汗拭いてとかじや  
ないんだから」

この人なら言い出しかねない。

どうしよう…でもやけになかつたら、ずっとねむり言われそう  
な気がする。

ここですべきは逃げるより相手を満足させるため、要求をのむ事だ。  
そう判断した俺はお粥をれんげで掬つた。

母さん特製の卵と梅干し入りのお粥から湯気がのぼっている。  
このまま食べたら火傷するかもなあ…

「冷まして

そもそもそれが当然、という風にお願いする姉ちゃん。

「・・・なんで？」

「見て分かるでしょ、食べるこは熱するの」

やつぱり、な。

そうすべきなのは分かつてゐるけど・・・恥ずかしいよ。ひとつてもね。  
二十歳を越えた姉に『』飯を食べさせてるのは、言葉では言い表わ  
せない恥ずかしさがある。

まだ町内をパンツ一枚で走つた方がましかもしれない。  
どうしてもフーフーするのが嫌だったのだが、我慢して冷ましてや  
つた。

「・・・ぬるすぎ」

口に入れた瞬間ろくに噛まずにぬかす姉ちゃん。

自分で食えと言いそうになつたが、病人相手に・・・いや、それ以  
前に、回復した後に3倍返しにされるのが怖いからやめた。  
文句を言つたわりに完食した姉ちゃんは、満足そうにお腹をさすつ  
ていた。

「ふう、美味しかった」

「これだけ食えるなら明日は大丈夫だな」

「当たり前でしょ。穴を開ける訳にはいかないから」

俺だったら、もしかしたらあともう一回学校をさぼりたい、なんて  
思うかもしれない。

まだ学生だった頃の姉ちゃんもそうだったはずだ。  
・・・少しは大人としての意識が出てきたのかな。

「巽、おでこ借りるよ」

「は？ ちょ、ちょっと？！」

いきなり額をくつつけてきた姉ちゃんに驚く。

おっ俺達は姉弟だぞ？！やめろって！

姉ちゃんは目を閉じたまましばらく止まっていたが、やがておでこを離した。

「・・・やっぱ自分じゃ分かんないか。どうだつた？おでこ熱かっ

た？」

「わ、分かんない」

「もう、ちゃんと測れよ。しうがない奴だな」

姉ちゃん・・・いい加減弟を振り回すのはやめてくれよな。

～～続く～～

## 10・蒼太も風邪をひく

一難去つてまたなんとやら、姉ちゃんが治つたと思つたら今度は…

「兄貴、大丈夫か？今日は無理しない方がいいんじゃないかな」「あんまり休みたくないんだよ。単位は落とせないからな」

真面目な兄貴は昔から休むといつ事を知らない。

遅刻すらした事が無く、それをやるのは悪いんだと思つていそうな気がする。

「大丈夫だつて、たまには休んでも罰は当たらないつてば」

諸悪の根源、といふか元凶の姉ちゃんはけたけた笑いながらのんびり「ヒーヒー」を啜っていた。

「姉ちゃん、なんだその言い草。誰のせいだよ  
「チゲ鍋」

悪怯れもしないで平然と言い放つ姉ちゃん。  
お前なんか幼稚園からやり直せばいいのに。

帰りの車で隣同士だつたからつづつちやつたんだろうか？

兄貴はそんなに体は弱くないんだけど、人並みくらいに病気を患う。と言つても普通の人が年間で何回風邪をひくのかは分かんないけど。

「さあ、もう行かなきやいけない時間だ。『駄走様母さん』

「大丈夫なの蒼太？顔色悪いわよ」

「ちょっと寒氣がするけど・・・歩けないって事は無い。だから・・・

・

立ち上がりうとした兄貴がふらついている。

通学なんて無理だう、自力で歩行するのも難しいなり。

「兄貴・・・休めよ」

「嫌だな。その願いは残念だが聞けない」

「だからこそ、だ。無理したら明日はもつと酷くなるかもしねり  
んだぞ」

「・・・・・・」

兄貴は少し考えていたけど、パジヤマに着替え始めた。  
分かつてくれたか、良かつた。

「良く考えたらもうだな。休むのもあれだが、引き摺つてしまつのはもつと良くない」

「無理しないでね蒼太。紅音はもつと頑張った方がいいけど」

母さんの一言に姉ちゃんはぱつが悪そつにコーヒーを啜つていた。  
俺も同意見だな。

気を付けないと、もしかしたら俺やみどり、黄児も菌を吸い込んで  
るかもしねり。

今日は土曜日だから学校は今までしか無い。

「待たせちゃつたな」

「つづん・・・別に」

部活も無かつたのでみどりと帰る事にした。  
たまには友達と遊ばず、真っ直ぐ帰るってのも悪くないな。

「お兄ちゃん、ちょっと寄り道しない?」

「いいけど、何か用事か?」

「ぐん、どうなずくみどり。

たつたこれだけのやりとりだけど何の為に寄り道するのか大体分かつた。

兄貴想いの妹だな。

一緒に近くの薬局に寄つてアイスノンを購入した。

確か買い置きのは姉ちゃんが昨日使いきつたから、家には無かつたはずだ。

「風邪のときは冷やすのがいいんだよね」

「ああ。よく気付いたな、それが切れてたつて

「お兄ちゃんも気付いてたんだ。さすがだね」

・・・別に、誓める様な事なのか?

よく見てれば気付くと思つけど・・・・・

うちの中では買い置きに対して無頓着な人が多いから、自然と気にする様になつた。

使いたい時にシャンプーが無い、歯みがき粉が無い、そんなのを繰り返し経験してきたからかもしれないな。

兄貴も物の置き場は詳しいんだがそこまでは注意が及ばないらしい。

「ただいまー

「・・・ただいま

帰ると母さんは居なかつた。

黄児もどうやらまだ帰つてきてないらしく、家中は静かだつた。

丁度お昼なのに「びひしたんだらへ、母さん。

「兄貴のところに行くか

「・・・うん」

買ってきたばかりのアイスノンを持ったまま、兄貴の部屋をノックした。

姉ちゃんと連つて静かにしてやうなことな。

「入るよ、蒼太兄さん」

音を立てない様にゆっくりドアを開けて中に入った。

「・・・巽、みどり、学校はもつ終わりか?」

「今日土曜日だぜ兄貴」

「そつか、高校は昼までだつたか」

「はー、これ」

みどりは袋から買ってきたアイスノンを取り出した。

「ありがとう、ちょうど欲しかったところだ」

やつぱり切らしてたか。

気付いて良かつた。濡らしたタオルでもいいけど、もつとちやんと冷やした方が効くからな。

「具合はどうだ?」

「寝てたから少し熱が下がったよ。まだ眩はするけどな

「もつと寝ないとダメだよ、蒼太兄さん」

「やうだな。でも、わざつてると思つとあんまつ寝られなくつてね

真面目だな、兄貴は。

姉ちゃんはもちろんだけど俺も少しは見習わないといけないか。  
でもたまには休んでもいいと思うぜ。

兄貴は昔から俺の知る限り毎日机に向かって勉強してたし、部活も  
休まず出ていた。

酒を飲むとまるで別人みたいな人格が憑依するのを覗いては、欠点  
が無い。

父さんも母さんもきっと自慢の息子だろうな。

でもずっと頑張ってたらさすがにいつかはガタが来る。  
今日くらいはゆっくりしたって罰は当たらないさ。  
ましていつも見てない所でも頑張ってる兄貴なら、人よりも疲れる  
んだし。

「・・・どう?」

「気持ちいいよ、ありがとうみどり」

・・・お、照れてる。

あんまり表情には出ないが、みどりはいつも兄貴に誉めてもうひとつ  
嬉しそうだな。

風邪をうつされたのは災難だつたけど、俺はそこまでついてないと  
は思わない。

きっと日頃の疲れが溜まつてたんだろう。

／＼＼＼＼

母さんの作ったお粥を食べた後、兄貴はまた眠りについた。  
そして夕方、姉ちゃんが帰ってきた。

「ただいまー」

「よう、諸悪の根源」

「あん？誰に向かってそんな口をきくのだ」

「兄貴に風邪うつして自分はさつわと樂になつた邪惡なお姉様に喋つていい」

姉ちゃんはコートを脱いで椅子の背もたれにかけた。

ハンガーじゃなくそこに置いたって事は、また遊びに行くつもりだな。

かと思つたらポケットから何やら取り出した。

「なんだそれ？」

「・・・爆竹、風邪にはショック療法よ

つまらない冗談だが中身が何かは大きさで大体分かった。

・・・姉ちゃんも気付いてたんだ、買い置きが無い事。

責任つていうか、罪悪感みたいなものはちゃんとあるんだな。

まあ当然っちゃん当然だけど・・・・・

次は氣を付けろよ。

～～続く～～

## 11・黄児は風の子

「うわあ～～～～」

寒いけど思い切って空気を入れ替えようと窓を開けたら、真っ白だつた。

屋根も道路もポストも、白い雪が降り積もっている。

昨日の夜は晴れてたのにいつたいいつ降ったんだろう?

雪国で育った父さんはこんなに積もつたうちに入らない、なんて言うだろうな。

「・・・すゞい・・・・

自分で口にしといて何が凄いのかは分からぬ。

でも、こんなに積もつたのを見たのは久々だから、ちょっと嬉しかつた。

特に用事も無いけど外に出たくなり、パジャマのままドアを開けた。

「あっ、たつにいーーおはよーーー！」

いたいた。

うちで一番風邪とは無縁な元気の塊が。いつから起きていたのか、既に雪だるまを一体完成させている。

「黄児、早起きだな」

「どうだたつにい、おれの作った雪だるまーーー」

「・・・凄いな」

お世辞じゃなくて本当に凄い。

1人で俺とそんなに代わらない背丈の雪だるまを作るなんて、なかなか出来る事じゃないからな。

「でも、もう飽きたやつた。ただ転がすだけじゃつまんない半袖で鼻やほっぺを真っ赤にしている。とてもじゃないが俺には相似できない格好だ。

「たつこーーー雪合戦しようぜーーー！」

「待てよ、こんな格好で・・・つぶつ？ーーー！」

いきなり顔面を雪のつぶで狙われた。まったく、子供ってのは容赦無いよな。こっちの返事も聞かずに遊び始めるんだから。

「どんどんいくぞたつこーーー！」

「おじ黄兎、ちょっと待てって。だから、やめり・・・・・」

痛がるふりをしつつ蹲り、足元の雪を搔き集めて玉を作る。調子に乗つて近付いてくるのを見計らい、複数を一気に投げ返した。

「うわあああ？！」たたた、やつたなたつこーーー！」

「投げるのはひとつだけとは限らないぜ、油断したな

「この、おかえししてやるーーー！」

痛いし、冷たいし、楽な遊びでは無いけど・・・

楽しいな。シンプルだけどそれがいい。ドッジボールに夢中になつたあの時の気持ちを思い出す。

パジャマがびしょ濡れになつたので、厚着してからもう一度遊ぶ事にした。

黄児は着替えたくないと」ねていたが、やがて母さんは勝てず  
黄色いジャージに着替える。

「よーし今度は負けないぞーー！」

「なあ黄児、雪合戦もいいけどか、あれ作らないか？」

「え？ あれ？」

「そうだ。これだけ降つたら作れそうだからな」

敢えて何を作るのか、その物の名前は伏せた。  
まあ途中で氣付くとは思つけど、楽しみは後に取つておいた方がいいからな。

庭にたつふり降り積もつた雪を、スコップを使って集めていく。

「また雪だるま作るの？」

「いや、違う。まあすぐ分かるぞ」

俺よりも早いペースで雪を掘つていく黄児。

小学生なのに力が強いからな。ちょっと加減を知らないのが玉に瑕  
だけど・・・

庭の真ん中にちよつとした大きさの丘を積み上げた。

さあ、ここからが本番だ。慎重にいかないと失敗するからな。

「次は真ん中に穴を掘るんだ

「はーい！ 六堀り！ ！」

スコップではなく手を使つていて。手袋もしないでよく出来るな。

尊敬するぜ。

黄児は寒さに本当に強いな。羨ましいぜ。

丘の中をぼじぐる様に雪を出しながら穴を開けていく。

天井が崩れない様に手で少しづつ固めながら、慎重に作業を進めた。

「たつにい！もしかしてかまくら作るの？！」

「よく気付いたな、その通りだよ」

「やつたあ！みんな入れる大きさにしようぜ！…」

「ん、ちょっと雪が足りないかな。沢山降つたとはいへここは雪国じゃないから」

「そつかー。でもたつにいとおれは入れそうだな！…」

ちつちやい時もこうして作った事があったな。

見よう見真似というか詳しい作り方は知らないので、すぐ崩れないか心配だな。

やつとかまくらが完成した時には、黄児みたいに俺も鼻や耳が真っ赤になっていた。

「出来たーー！」

「意外と形になってるんじゃないかな？」

これなら2人くらいは余裕で入れそうだ。

雪にあまり縁の無い俺にとっては、雪だるまよりもレアで好きだ。早速中に入り、黄児と向かい合って座つた。

最初のうちは天井や中を見回していたが、すぐに飽きてしまつたらしく・・・

「雪合戦やろうぜたつに！」

「急がなくてもいいだろ。せつかく完成したんだし、もう少し鑑賞しても・・・・・・」

「早くやろうぜ！次も負けないからな！」

「おこおこ、負けてないぞ俺は。わしあは引き分けだらばいつ考えて  
も」

「連勝するだ……一番強いのは！」のおれだからな……」

喜んだのも束の間、黄児はもう臨戦態勢に入っている。  
やれやれ、兄貴の気持ちなんてやつぱり弟には伝わらないものなの  
かな。

どうしてやう戦うのが好きなんだ。困った奴だ。

ならば、これならどういふ反応をするかな。

「！」で朝飯食わないか

「…………！」

ほら、うまくいった。

目の色が変わつたぞ。飯の力は偉大だ、黄児には特にな。  
2人揃つてかまくらで食事したいと母さんに言つたら、早速作つてくれた。

小さく切つたフランスパンにレタスやベーコン、トマトを挟んだサンデイッチを一緒に頬張る。

「つまいなたつにい……」

「ああ、たまには」ついてつ所で食うのもいいだり

「つこつまつたりした朝もいいよな。

雪合戦はちょっとハードで、落ち着けないから……

黄児くらい元氣が有り余つてゐるなりいんだけど、かまくらの中でのんびりするのも悪くない。

しかし、黄児は一緒にいて疲れるが、いつも元氣を貰えるな。

・・・ん？矛盾してゐかな、言つてること。

「いいやつをまでした！！」

「面かつたな」

「じゃあ行くぞ、ほりいじりあは終わった！！」

「ひっぱりやうなっしゃうのかい、弟よ。

・・・本気なんだな、分かった。そのつもりなら俺も全力でいかせてもらいうー。

「こぐぞたつにこーーおれの本気を見せてやるーー..」

「奇遇だな。俺もそう思つてたところだ

いつかまた、一緒にかまくら作うつな。

今日はこれから雪合戦だけビ・・・遠慮しないぞ。

～～続く～～

## 12・みどりは風邪のト

「寒い寒い寒い寒い！..」

「寒い！..寒い！..寒い！..」

雪合戦に夢中になり、俺と黄児は仲良べずぶ濡れになりながら家に駆け込んだ。

「どうしたの2人とも・・・あらあら、水溜まりで転んだの？」

「雪合戦してて・・・母さん、風呂湧いてない？」

「朝に湧いてる訳無いでしょう。でもシャワーは出るわね、風邪ひくといけないから早く入りなさい」

「「はーい！..」

いやいや、恥ずかしい。

黄児と遊んでいて気が付いたらこんなんだ、ああ寒い。

競う様に着ているものを次々とキヤストしてからオフしていく。あれはスイッチ、つていうかレバーひとつで出来るから楽だな。シャワーはお湯が出るけどやつぱり熱い浴槽に浸かりたい。触つたら意外とあつたかいので、湧かさずにそのまま飛び込んだ。

「ああー寒かった。たつにい、手力チカチだぞ」

「おわつ、お前の手熱いな。いいな、羨ましい

「まあな！..おれ、カラダにエネルギーたくわえてるから！..」

白慢気に盛り上がった腹を叩く黄児に、思わず笑ってしまった。触られるのは嫌がるくせに、自身の体型は誇らしいのか。

黄児が一緒だからぬいどいろかなり熱い。

男同士で風呂に入るのは普通に考えたら恥ずかしい行為だけど、相手が小学生の弟なら別に変な感覚は無い。

「お前はこれからも風邪にはならないな」

「おひつーーーおれは強くなりたいからな、風邪なんかひいたら弱くなるーーー」

ヒーローならば体が丈夫じゃなくちゃならない、これが黄門なりの哲学なのだ。

病気も避けて通りそうな眩しい太陽だからな。きっと、何もしなくても強運や大切なものを引き寄せられる強烈なオーラを持っているに違いない。

「もう出ようか、十分あつたまつたぞ」

「せうだなーーー今度は家の中で遊ぼうぜたつこーーー」

あれだけ雪合戦としてまだ遊びたいのか？

まあ、いつか。今日は日曜日だしな。

すっかりあつたまつてしまい、パンツ一枚でリビングに向かつ。

「・・・・・おはよ」

「お、おひ、起きてたのか」

「うん・・・」

みどりのやつ、何だか元気が無いな。

元から白い顔が青ざめてあまり良くない色になつてゐる・・・

「お前、もしかして」

「・・・昨日から寒氣してて、起きたら風邪ひいてた」

きつと伝染だな。

多分兄貴の風邪をもらつたんだろう。

一緒に部屋に入ったのになんで俺は平氣なんだ・・・?

「やめてよ、2人してそんな格好。見ると寒氣するし、みつともないよ」

なんだかみどりに言わると妙に恥ずかしい。

面白がつてはしゃげうとしている黄児を宥め、半ば無理矢理服を着せた。

いくら妹とはいえ病人の前でふざけるのは良くない。

「大丈夫か?」

「ちょっとぼーっとするだけ。そんなに・・・お兄ちゃんは平氣なの?」

「ん、まあな。今のところは特に」

みどりは錠剤を口に含み、ゴップで飲み下した。

これで3人目か・・・もう2度と姉ちゃんと辛いものは食わせない様にしよう。

いや、それは別に自由なんだけど挑戦するなら一人でやつてほしいよな。

みんなに風邪をばらまくなんて、まるで歩く生物兵器みたいな人だ。

「後で見舞いに行くよ」

「・・・柏餅持ってきてね」

「食えるのか?」

「治つたら食べる」

「一緒に食べよせみどねえ!...」

具合は悪そつだが姉ちゃんや兄貴よりはまだ軽そつだな。  
しかし、黄児はともかく俺はまだ無事とは・・・意外に風邪には強いのだろうか？

「おれもお見舞いしたい！！」

「いいけど騒ぐなよ。お前はとにかく声が響くからな」

「大丈夫、あんまり騒がないようにする！！」

こいつの騒がない、はあてにならないんだよな。

なんせあの姉ちゃんに張るくらい落ち着きが無いから、平氣で暴れ回りそうだ。

でも心配してゐみたいだし、信じてやってもいいか。

いくら小学生とはいえもう高学年だし、それくらいの分別はつくだろつた。

「じゃあ行こうぜたつにい！！！」

「えっ、まだ早いだろ。それに遊びたいんじゃないのか？」

「みどねえのお見舞いしてから！！」

「お、おいおい」

遊びに行くんじゃないんだぞ、そんなに走るな。

黄児はノックする事もなくみどりの部屋に入った。

「みどねえ、もうなおったか？！」

「大声出すなよ黄児。みどりは病人なんだぞ」

「大丈夫・・・ふふつ、黄児はいつも元気だね」

「先生にもほめられてるぞ！！いつも元気だよねって！！」

俺の話を聞いてるのか？

全く声量を下げるよとしない黄児に呆れてしまう。

さつき注意したばかりなのに、あの返事はなんだつたんだよ？

「・・・あれは？」

「あれってなんだ」

「柏餅・・・・・」

「そんなのあるわけ無いだろ。本氣で言つてたのか？」

「半分は「冗談」

なるほど、みどりなりの「冗談」だったのか。

そんな冗談が言えるならすぐに治りそうだな、良かった。

「ねえお兄ちゃん・・・・

「どうした」

「・・・お兄ちゃんは、風邪ひかないでね。あんまりここに居なくて  
てもいいよ

「なんだよ、邪魔か？」

「・・・・・うん」

これも「冗談」と思つけど、みどりが言つと本気で聞こえるな。  
普段あまりふざけないからだろつか？

「心配するな、長居はしないさ。もうちょっとだけだといふよ」

心なしか顔色もついたきより良くなってきた気がする。  
みどりとは歳も近くて静かなので、一緒にいると落ち着くのだ。

「みどりねえの部屋つて緑色だらけだな！森の中みたい！！」

黄児が太陽だとしたら、みどりは月みたいに静かな雰囲気だな。  
好きな色も落ち着いた緑色だし、とにかくみどりは安らぐ。  
姉ちゃんがあんなだからこそ余計にそうなのかもしねない。

早く良くなつてほしけ。

また明日から一緒に学校行こうぜ、みどり。

「寝れないのか？じゅう羊数えてやる」

「・・・お兄ちゃんが数えたら意味ないでしょ」

最近つつこむ様になつてきたな。  
嬉しいぞ、別に面白くないけど・・・

続

### 13・異も、風邪の子

「、今回もまた私が語り手を勤めちゃいます。

進藤みどりです、」うう形では2度目ですね。

まだうまく話せませんけどよろしくお願ひします・・・

お姉ちゃんから始まって蒼太兄さん、そして私と次々に寄生してきました風邪なんですが、遂にお兄ちゃんにも伝染してしまいました。

風邪ひかないでね、つて忠告したのに・・・・

なので週の始まりからいきなり学校を休んでしました。  
今朝は黄児と2人きりの登校です。

「みどねえ風邪大丈夫か？！」

「もう治ったよ、でもお兄ちゃんが・・・」

「なんでたつにいだけ風邪ひいたんだろうな？おれも一緒に見舞いしたのに」

「さあね。黄児の体にも一応ウイルスは入り込んだんじゃない？でも弱くて負けたとか」

不思議でしょうがないです。

お兄ちゃんはお姉ちゃんも蒼太兄さんもお見舞いしたらしいので、風邪をひいても仕方ないとは思いますけど・・・

黄児の鉄壁のセキュリティにはいつも驚かされてしまいます。

そう考えるとお姉ちゃんの体内の警備はガルもいいところですね、はい。

「ちゃんとお見舞いしてやろうぜ、みどねえ！――」

「そうね。してもらつたら嬉しいから」

とつでも恥ずかしいといつか、正直いつとお兄ちゃんにお見舞いしてもらひのは照れます。

でも、悪くない気分です。ちょっと恥ずかしいくらいの方がいいんでしょうね。

家族は仲が悪いより良い方がいいに決まってるし・・・・。

それに、してもうたんだからちゃんと返してあげなこと。

「おれ、たつに」とゲームするんだ!!」「

「黄児・・・お兄ちゃんにそんな元氣残つてるかな?」

「そつか、無理か。だったら一緒にトレーニングするーーー。」

「いや、だから、風邪ひいてるんだよ。それも無理」

「だったらお風呂入るーーー。」

「・・・ねえ黄児、お見舞いの意味分かる?」

すると黄児は満面の笑みでうん、と頷いた。

そうなの、分かつてんんだね。悪気は無いんだよね、黄児は無邪気だから。

・・・大丈夫かなあ。

この間アイスノンを貰いましたがもう無くなつてしましました。お姉ちゃんも買ってきてくれてたんですが、立て続けに私達が倒れたので使い捨て状態です。

「みじねえーーー」ひきうちーーー。」

駅で待ち合わせしていた黄児と会い、近くの薬局に行きました。

「・・・上着は?」

「暑いから脱いだーーー。」

ランドセルからはみ出しているパーカーを見せながら、黄児は笑っています。

「ダメだよ、ちゃんとした格好しないと」

「平気だよ、風邪なんかやつつけてやるからさ……」

・・・風邪というのは本当に侮れません。

そもそもの原因はお姉ちゃんなんですけど、伝染し続けて私達兄弟をほぼ全滅させたのですから・・・

だから、黄児もきっといつかは風邪に倒れるでしょう。

でもそれを言うと絶対に負けないから、と引き下がろうとしません。なのでもうあまつうるさく言うのは止めてしました。

「早く買おうぜアイス！！」

「・・・アイスノン、ね」

「わかつた、そうそれ。アイス！！」

「・・・・・・・・」

果たして何を分かったのでしょうか？

黄児は無邪気なのか天然なのか、人の話をちゃんと聞かないのかよく分からなくなる時が最近よくあります。

きっとお姉ちゃんに可愛がられてるせいじゃないかと・・・  
飼い主に似る、なんていう言い方がありますから。

「探していくーーー！」

「ちよつと、そっちは違う・・・黄児、待って

やつぱり人の話を聞こえとしません。まるで違うコーナーの方に走つていきました。

仕方ないので、目的の品を手に取つてから追い掛けると、既にカゴいっぱいにお菓子を入れています。

「買つて！」「

「ダメ。もうすぐ」」飯でしょ！」

「大丈夫、『ご飯は別腹！』」

「その言葉誰に教わったの。お姉ちゃんでしょ」

「うん！…」

高校生の私のお小遣いでは、黄児のおねだりを聞いてあげるには少々厳しいです。

黄色い箱のこれはダイエット食品ですが、こんなに沢山食べたら脂肪になってしまいます。

それ以上もう蓄えなくてもいいのに。

家に帰つて、早速買つてきたばかりのアイスノンをお兄ちゃんに渡しました。

「・・・悪いな、みどり」

「昨日やつてもらつたから」

「たつにいー！ゲームしようぜーー！」

「黄児・・・いけないって言つたよね？」

「はは・・・そうだな、具合が良くなつてからな」

自分も辛いだらうに、お兄ちゃんは黄児と遊ぶ約束を交わしました。

本当に・・・優しい。

私だったら断つちゃうと思ひ。ですがに勘弁して、と余計な一言も加えてしまつはず。

「じゃあいつ治るんだよ？…つまんないぞ！…」

「黄児・・・あんまり怒鳴らないで。風邪ひいてると辛いの」

「あ、そっか。」めんなたつに、「うるせかった」「ああ、すげえいるさいな。ボリューム下げろ」「うひ、触るなよ……」

黄児のお腹をつまむお兄ちゃん。

怒ってるのかな、と思つたけど顔を見たら笑つてたので、多分ふざけてるみたいです。

黄児は基本的に誰でも懐きますけど、特にお姉ちゃんとお兄ちゃんには懐いてるみたいで……

「なあ、みどり。お前はもう大丈夫なのか？」

「うん……もう熱は下がったから、多分大丈夫」

「無理しなくていいぞ。病み上がりは危険らしいからな。せつかく治つても、また風邪ひいたらつまんないぞ」

自分も苦しいだらうに、私の心配をしてくるお兄ちゃん。

嬉しいよ、そういうの。でも……たまには、とこつかいの時くらいは、自分の心配してあげて。

「気を付けるから……それより、いつどがあるでしょう？」

「なんだよ」

「…………優しくて、しかも、可愛い妹に、ありがとうの言葉」

「…………慣れない事言つもんじやねえぞ。きいちんなさすが」

「うぬわー、早く言えばー」

……いこじやない、普段は無口な妹が冗談言つてもや……

明日からまた一緒に学校行きたいな。  
早く良くなります様に。

} 続く

## 14・輝子、風邪の母

兄弟を襲つた風邪は、俺から出た後に姿を消した。かと思つたら一番最後にとんでもない相手に伝染していたのだ。

「大丈夫か？ 母さん」

「うん、ちょっと苦しいけど・・・明日には治るわ」

新聞取りのヤクザですら簡単にひねつてしまつ母さんですら、病気には勝てなかつた。

起きたらもう倒れていたので、いつも忙しない朝が今日は十割増しで忙しい。

いやいや、朝はいいんだ。

パンや卵くらいは自分で焼けるし、軽い物なら問題ない。

調理に時間がかかるだけでそれ程大したことはないんだよな。

「姉ちゃん焦げそうだぞ」

「火止めて！ いま立て込んでて手が離せない！」

姉ちゃんは卵を焼きながら合間を縫つて化粧していた。

今朝は寝坊したのでただでさえ時間が無い。だからいつぺんにやうとする気持ちは分かるけど・・・

「やばいもう行かなきやー！」

少し焦げ田のついた卵をパンに乗せて、呑えながら慌ただしく出かけていった。

しかしこれでキッチンに静寂が訪れた訳じゃない -

「えっと・・・卵つて何分焼くんだけ、蒼太兄さん」

「聞かれると意外に答えられないものだな」

「みどり、兄貴！のんびりしてる場合じゃない、蓋から煙が出てるぞ！」

「えつ？！」

慌てたみどりが蓋を開けたが、すでに焦げた卵がそこにあった。

「最初にフライパンを熱し過ぎたのが原因じゃないか？」

「あっ、そうかも・・・加熱して、それから入れた」

「早く代われよ、後がつかえるんだけど」

そういうえばみんな、殆ど料理しないもんな。

手伝いくらいはするけど、せいぜい食材を切つたり果物の皮を剥くくらいで、火を使うのはみんな母さんだから・・・  
ここにいなくて初めて気付く、母さんの偉大さ。

大概はそつなくこなせる兄貴も料理は駄目だったか。

調理実習じゃ特に失敗した事は無いんだけど、先生がしつかり教えてくれたからだろうな。

・・・そういうば、姉ちゃんは出来ないのか？ラーメン屋で働いてるから出来そうだよな。

みどりと一緒に帰宅してすぐ母さんの具合を確認した。

朝よりは顔色が良くなっているけど、まだ辛そうだ。

夜も休んでた方がいいだろうな・・・

「朝みんなが学校行つた後キッチン見たけど、凄かつたわね」

「ん、まあ・・・あれでも片付けたつもりだけど・・・」

「・・・」

凄いといつのは、多分充满した焦げ臭さだろ？な。

姉ちゃん以外は仲良く卵、パンを焦がしたので、それらが重なった匂いは結構きつかった。

「…」めぐ、母さん。心配かけさせてしまつて。

「大丈夫よ、少しなり起きられるから」

「いや、無理しないで。今日一日くらい我慢出来るさ」

「無理したら明日に響くよ・・・何とかするから」

「・・・やう？ ありがと？ 必要になつたら呼んでね」

風邪はおそらく母さんが治つたら、Jの家から消えて無くなるだろう。

残るは父さんが黄児、我が進藤家の健康体一本柱だ。  
間違いなくどつちかに体当たりして砕け散るだろ？な。

父さんも昼間お見舞いに来たけど、母さんは仕事の心配ばかりして  
たらしい。

「でも、風邪はやっぱ怖いわよね。紅音、蒼太、みどり、巽、そ  
して私・・・ちょっと流行りすぎだけど」

「そうだな。まあ、人数多いからしじょうがないのかも」

「・・・・・・・・」

少々長かつた風邪と俺達家族の戦いも、これで終わりか。

結果は7戦中2勝5敗、ぼろ負けだ。

どんな人でも流行りの病には勝てないよな。

うちの場合2つも勝ち星があるのが奇跡かもしけないけど・・・・・

インフルエンザじゃ無かつただけ有難いかもしれない。  
あれは風邪よりずつと始末が悪いからな・・・

母さんのアイスノンを取り替えてから、静かに部屋を出た。

「・・・早く良くなつて欲しいね」

「ああ・・・まだ辛そうだつたぜ、母さん」

元はといえば姉ちゃんが風邪をひいたのが始まりだよな。  
遊ぶつていうか何かに挑戦するのは結構だけど、自分だけなりで  
おき、周りを巻き込むのだけは良くない。

6時ちょっと前、その姉ちゃんが帰ってきた。

「ただいまー・・・ふう、やつぱり重いな」

ちょっと大きめの袋を持っている。

ふん、自分のせいでも母さんが倒れたというのに、呑気に買い物かよ・

・

「おつ?なんだその目は異」

「・・・心当たりが無いのですか、お姉様」

「そういう態度を取るのかい。あつそう、じゃないらしいんだ」

「・・・何を?」

姉ちゃんは俺に袋を差し出してきた。  
中を覗くと、パッケージに包まれた餃子が重ねられていた。

「凄い!これ、どこで?」

「うちの店で買ったの。作つてすぐ入れてもらつたから、まだあつ

たかいと思つよ

早速出そつとしたら袋を引つ込められた。

「こりないんじょ、異。欲しくてもやんないけど」

「・・・ごめんなさいー」

「感情がこもつてない。それに語尾を伸ばすな」

「謝つたからくれよ。いこだろ姉ちやん」

これで夕飯は何となる。

それだけにしてはやけに量が多いなと思つたが、多分明田の分も買つてきたんだるうつな。

「あっ、みどり！」

「ふざけてないで、早く食べよ。みんなもつお腹空いてるんだか

ら

「へーへー、分かりました」

唇を尖らせながら、姉ちゃんは買つてきた餃子を広げる。  
そういうや、姉ちゃんの職場のもの食べるのつて初めてだ。  
なんか嫌だから来るなと言われてるけど、わざわざ行くつもりもないで未だに寄つた事は無い。

母さんが作つたんぢゃない料理が食卓に並ぶのは珍しいな。  
たまにはいいか、こりうつ夕飯も。

「つまーいーーー」

餃子は、一口が大きい黄児が食べてもまだ半分残つてゐるくらい大きい。

「まあね。私が原因だし、これくらいはしないと

「姉ちゃんが作ったのか？」

「・・・・・うん

「なるほど、違うんだな」

「ひむかーー黙って食えー！」

今田もうちは賑やかな食卓だ。

・・・でも、母さんがいないからちょっと寂しいな。

明日にはまた戻ってきます様に -

～～続く～

## 15・まゆり、雨降り

友達と遊んでから帰るついしたちよ「うじ」その時、雨が降ってきた。小雨だと思ったら瞬く間に勢いを増していき、僅か数分でバケツをひっくり返した様な強い雨に変わってしまった。

「こつやあまざいな……」

家まで歩いて大体10分くらいの場所にいたので、わざわざ傘を買つのも勿体ない距離だ。

急な雨はすぐに止む事も多いので、しばらく雨宿りする事に決めた。朝見たら天気予報は1日晴れるって言つてたんだけど、やつぱりあてにならないな。

しかし参ったなあ、何もこんな時に降り出さなくとも……。

心中でブツブツ文句を言しながら近くのコンビニに駆け込む。

「おっ・・・みどりか」

「お兄ちゃん・・・もしかして雨宿り?」

「まあな。傘もわりと高いし、できれば買いたくない。少し止むまで待つてようと思つて。お前もか?」

するとみどりは「へん」と頷いた。

なるほどね、さすが妹。考える事は同じなのか。

雨はコンビニの窓ガラスを叩いてくる。

こつや・・・果たしてすぐに止むのかは分からぬ。

早速、今日発売の漫画雑誌を手に取つた。

田畠の漫画から読み始めて、一通り田畠を通す。

みどりはお菓子売場の方で棚を見ている。

さて、どれくらい時間が過ぎただろうか。  
何気なく時計を見て雑誌に目を戻し、そしてもう一度時計を見てしまった。

「ウソだろ・・・?! まだ10分も経ってないのか?！」

自分の中ではもう30分は過ぎていたのに、どうしてだ。  
テスト中はいくら時間があつても足りない。溶けていくスピードが  
授業中とは桁外れなんだが、それと同じだ。  
仕方ないので普段は読まない青年誌を手にとつてみた。  
・・・・・違つ、この雰囲気、なんかちょっと嫌だ。  
俺は努力して強敵に勝利し、そして友情を築く、直球の熱血がいい  
んだよ。

悪役が活躍しがちな雰囲気つのはみどりも苦手なんだよな。

重い気持ちで時計を見たら今度は5分も過ぎていなかつた。  
雨は、まだまだ強い。

「・・・・・なに難しい顔してんの?」  
「うわっ?！」

いきなり横からみどりに話し掛けられ、読んでいた雑誌を落としそうになってしまつ。  
家の外で気配を消すな、驚いたぞ・・・まったく。

「お前、いつからそこへいたんだよ」

「たつた今・・・」

手にまちやつかりいぢご大福を持つている。

「それ買つのか？」

「うそ。もう帰らうよ、たぶんこのまま降り続けるかい」「もうちょっと待つてよつぜ」

「傘なら買つてあげるけど···」

「妹にそんな事してもらわなくともいい

妹に借りを作つてしまつのはなんだか恥ずかしかった。  
なんで雨宿りをしたのか理由を話すんじやなかつたなあ。  
しょうがないか、雨はまだまだ弱くなりそうにないし。

「···・···・···・しまつた

「どうかしたの？」

「財布持つてきてなかつたんだ。せつせ友達と遊んだのこ、忘れて  
た」

「···・···・···・

やめてよみぢり···

その、軽蔑する様な眼差し···・···・

姉ちゃんにかられるより傷付こちやうんだよな、それ。

なんと情けない、そしてみつともない。

みどりに傘を買つてもひつなんて···・···・

「あれ? つじやないのか?」

「うそ」

でもみどりはひとつしか買わなかつた。

おこおい、お前は濡れて帰れってか？おとなしそうな顔して姉ちゃん以上の鬼畜だったのか。

「ンジーから出るとみどりは早速傘を差した。だが、動かすにその場に止まつている。

「帰らないのか、みどり」

「入つて」

「は？」

「一緒に帰ろう、お兄ちゃん」

いやつ、いやいや、待ちなさい我が妹よ。  
なんなの？それってなんなの？

何のつもりか分からぬけどお前に萌えたりなんかしないからね、  
お兄ちゃんは。

「こー。こつまでもこじるいる訳にいかないでしょ？」

「お、おー！」

みどりは俺の手をとり、半ば無理矢理傘の中に入ってきた。

ちょっと待てって・・・何この雰囲気？

ほのぼの系じやなかつたのかよ、これ。

どしゃ降りの中いつの間にか俺が傘をさしながら帰路につく。  
肩が触れ合つてゐ・・・な、なんかイヤだな、この空氣。

みどりの事は好きだよ。

妹として、な。異性としてなはずがないだろー。

・・・何考てるのこの子。

わざわざ一緒に傘を差して帰りたがるなんて、このハランコめー！

間違えた、ブリランだ。

「寒いね、お兄ちゃん」

みどりの言葉が田い息となつて寒空に溶けていく。

その横顔に思わず見惚れていると、急にこいつを向いた。

「そ、そうだな。冬の雨は辛いな

「・・・ふふつ。鼻真つ赤だよ、耳も」

やつらのみどりも同じ部分を真っ赤にしている。

「変な奴だな、お前」

「何が・・・・・・？」

「だつてさ、兄貴と一緒に傘差して帰りたがるなんて変わってるじ  
やないか」

「別におかしくないと思ひ。こつも時間があるなら一緒に帰つてる  
じゃない」

「ふうーん・・・」

みどりにひとつては特別な事じゃないのか、なるせび。  
・・・俺が意識しそぎなのか？

「ねえ、覚えてる？小学生の時さ、水溜まりとか大好きだったよね  
「ああ・・・そうだな。俺に限らず、子供つてのは水が好きなんだ  
「ひい

そんな事を話しながら歩くと、水溜まりを見つけた。

「・・・入つてみる?」

「理由は?」

「無いけど。でも懐かしいよね、水溜まり」

「お、おいー」

俺の返事も聞かずにおどろかつかつたそれに近寄り、おもむろに踏み込んだ。

「あ・・・」

「うわつ?ー」

意外に深くて水の量が多く、俺のズボンに跳ねた。

「何してんだよお前、冷たいだろ!」

「・・・あは、失敗しちゃった

そしてみどりのハイソックスにもかかってしまったので、仕方なくハンカチで拭いてやつた。

時々こうやって意味の分からぬい事をするんだよなあ・・・

「・・・・・照れ隠しだもん・・・

「なんか言つたか?」

ぶるぶる横に振る顔がやけに赤いのはなんでだ?  
雨は・・・まだ止みそうに無い。

（続く）

災難はこちらの都合もお構い無しに突然やつてくる。夕食後、みんなもう風呂に入つてそれぞれの部屋でくつろいでいた。黄児が遊びに来たので一緒にゲームしていると・・・

「わっ？」

いきなりテレビが消えて同時に部屋も真っ暗になってしまった。  
どうやら停電になってしまったらしい。

俺はここだよ。ちよこと落ち着け黄鬼。

弟に冷静になるのを促しているが、実は俺も動搖している。

くらい前が見えないものなんだろうか？

見事な程の暗闇だが真つ暗ではなく、窓から微かに明かりが入つて  
くるので、ちゃんと隣にいる黄児の輪郭は分かる。

参ったな、きっとブレーカーが落ちたんだろ？

い。こういうのは誰かが直すのを待つてゐるより、自分でやつた方が早

「ちょっと待つてろ黄児、ブレーカー直していくる」「嫌だよ、おれこわい。一緒に行つていいか？」「すぐ済むからおとなしくしてろ。怖くないだろ」「ヒーローでも暗闇は苦手なんだよー！」

そして・・・結局、ついてきてしまった。

しうがない奴だな。でも仕方ないか、暗闇が好きな人間なんてなかなかいないうな。

気にならないのは寝ている時か、かなり落ち込んでいる時くらいだろうし・・・・・・

部屋を出て少し歩いたら何かにぶつかった。

「痛つ！」

「・・・ん、異か？」

「兄貴？そこにはいるのか」

黄児と同様、輪郭や雰囲気しか分からない。

服の色はおろか顔のパーソナリティすらはつきり分からなかつた。

「ああ、ブレーカーを直そうと思つてな

考える事は同じか。

でも、兄貴がついてるなら安心だ。

俺達男衆は寄り添う様に、正確には兄貴についていく様にゆっくり階段を降りていく。

懐中電灯があれば便利なんだけど部屋には置いてなかつた。

それは兄貴も同じで、微かな明かりを頼りに進んでいく。

「点かないな・・・・

リビングにあつた懐中電灯で照らしながら兄貴がブレーカーを直した。

だが、電気は復旧しない。

もう一度下ろしてまた上げたが、やはり点かなかつた。

「どう? 蒼太。直りそう?」

「いや・・・駄目だ。何度かやってみたけど、なんともない」

「じゃあ近くの電柱に何かあったのかしらね」

母さんの言ひとおりかもしない。

確認の為に外を見てみたけど、近くの家も同じ様に停電してゐた  
いだ。

さて、どうしたものか。

取り敢えず復旧するまで待つしかないかな。

暗闇にも日が慣れてきたが、やっぱり互いに顔が見えない。

「・・・・・」  
「・・・・・」  
「・・・・・」  
「・・・・・」

リビングにいるのは父さん以外の家族全員。

父さんはこの時間はたまに仮眠を取る事があり、日付が変わる頃に  
起きて朝まで執筆するのだ。

無理矢理起こすのは可哀想だからやめておこう。

賑やかな姉ちゃんですりつけから口数は少ない。

「みんな、黙つてたらもうと辛くなるわ。復旧するまでしつとつで  
もしょつか」

かなり唐突な母さんの提案に戸惑つ。  
でも、姉ちゃんはそれに乗つた。

「いいよ。黙つてるより喋つた方が気が紛れるからね」

「じゃあ順番はどうする？私が最初で兄弟順に『きまじょ』つか」

「それでいいよ、母さん」

兄貴も、やる気らしい。

なんだか少しづつ元気が出てきた気がする。

そりやあ今も不安で仕方ないけど、こつまでもいひしてたらむつと仕方ない。

「じゃあ最初は、暗闇」

「おい母さん、停電なのにいきなりその言葉かよ！」

「巽、アウト。しりとりだからツツコハは禁止」

「勝手にルールを作るな！」

姉ちゃん、悪乗りしてるな。

いつもだつたら鬱陶しいけど今はそれが心の支えだった。

「気を取り直して・・・最初は携帯電話

「わ、か。じゃ和服！」

「蜘蛛の巣」

「す、す、酢豚！」

「・・・・・太鼓」

「根性！..」

取り敢えず一巡した。

次はまた母さんからだな。

「占い」

「い、ね。イライラさせる真ん中の弟」

「それは俺の事か？！姉ちゃんふざけんなよー」

「またつっこんだ、しかも蒼太に割り込んだ。次やつたらキャメル

クラッチだよ」

「だから勝手にルールを作んなつてのー！」

・・・さつきみたいに大人しい方が良かつたんじゃないか？いや、まず落ち着こう。つっこんだら負けなんだ。姉ちゃんの思つツボなのを理解しなくちゃならない。

「じゃあもう一度、いからね。イカの塩辛」

「ラッパ」

「ぱ・・・パンダ」

「・・・・・ダチョウ」

「占いーーー」

「黄児、それさつき私が言つたわよ

「あーそつかあーーー」

顔は見えないけど母さんが笑つているのが分かる。

それにつられてか姉ちゃんや兄貴、みどりもさつきよりは笑う様になってきた。

もう一戦しようかと思つたその時、急に目の前が明るくなつた。

「あら、復旧したみたいね」

時間にすれば僅か30分程の出来事だったと思うが、電気の有り難みを思い知らされた。

こんなに眩しくてあつたかいんだなあ・・・・・・

「じゃあ寝るわ、おやすみ」

「しりとつけどうするんだよ姉ちゃん

「母さんが復旧するまで、つて言ひたでしょ。だからもう寝るの・・・

・ふああ

「それじゃ、俺も寝るか。おやすみ」

「・・・・・・私も」

「おれも・・・なんか、眠くなつてきりやつた」

4人はさつと部屋に戻つてしまつた。

まつたく、みんな電気の有り難みを分かつてゐるのか?

「異ももう寝なさい。明日も学校でしょ」

「ああ、そうだけど・・・」

寝るにはまだ早い時間だつたけど、部屋に戻つた方が良さそうだな。

「母さん、おやすみ」

「ええ。寝坊したら駄目よ」

・・・俺達が不安ながらも落ち着いてられたのは、母さんがしつとりをやつてくれたからだな。

暗闇でも母さんがいたから怖くなかったんだ。

ありがとう、母さん。

風邪も早く治つて良かつたよな・・・・・・

（続く）

## 17・異の友達

さて、ここからちょっととの間説明が多くなるけど、長くないから我慢してくれ。

今まで読んでもらって、うちがどんな家族なのか分かつてもらえたかな？

1番上がアホでバカで、2番目が酒乱、俺が無難で4番目が透明人間、で最後がデブね。

大体こんな感じだ。

今回からちょっととの間、友達を紹介していきたいと思う。

まず最初は俺からだな。

そろそろ来るはずだが、今朝はやけに遅・・・

「あつ？！」

後ろからカバンをひったくり逃げていく泥棒。

何をしてるんだ、せめて最初の時はおとなしくしてればいいのに・・・

追い掛けようとしたその時、横から飛んできた靴を頭に食らって泥棒は倒れた。

「8時12分、逮捕ー！」

「やめろ由香、お兄ちゃんに対してなんて酷い真似を・・・」

「それはそっちだろ。早く異に謝れっ！」

取り敢えず説明する。

まずは2人の名前からにしておこうか。

こいづらは兄妹で、兄貴の方が一ノ瀬啓輔。じちのせいけいすけ

んで、俺の友達。

毎朝会うと何かしらやらかしていく素敵なお友達さ。

そして、妹の方は由香。

俺の友達だが、みどりの方が親しいかな。

2人とも小学生からの付き合いで、親友であり悪友でもある。

「巽、ここもひりてやつてくれ。そしたら少しばらしくなるだ  
ろうし」

「えーつ巽とー?あつはつはつ無理無理!有り得ないつて!」

「そりゃあこっちの台詞だぜ。誰がお前みたいな男女なんか、あた  
つー」

悪口を言つたらもう片方の靴を投げ付けられた。

この馬鹿力、投げるスピード、さすがはバスケ部で鍛えてるな。  
ちなみに、みどりも同じくバスケ部に所属している。

「・・・由香、みんな見てる」

「あつ・・・?ーちつ、覚えとけよ巽」

隣にいたみどりのおかげで何とか助かった。

さすがは親友、暴れ馬の止め方を良く知ってるな。

「い、ひら啓輔!返せ!」

隙を見て逃げ出しあがつた、あの野郎。

教室に着いたらしづきあげてやるからな。  
みどりと別れてから自分の教室に向かった。

するとカバンを抱えた泥棒こと啓輔が居たので、助走をつけて飛び

蹴りをかます。

「ぬおおー！」

このやり取りも小学生の頃からやつてゐるんだが、啓輔はまつたくやめる気配が無い。

だから、俺も蹴りをやめないだろ？。ずっと、一の先。

「まつたく仲がいいなお前達は。遠慮しないんだもんな」

俺の後ろに座つて、いるあいつが、肩を竦めた。

「こいつは、二葉義治。高校からの友達だ。

他にもいるけど大概はこの3人でつるんでいる。

「ひどいのよ義治君ー！」の男私に暴力ふるうのーもつ愛してないのかしら！』

「へつ、お前なんか親が金持ちだから結婚してやつたんだよー愛してるわけねえだろ！」

「ひどい！ひどいわ！だつたら義治君と一緒になるー！」

「おだまり！近寄るんじゃないわよこのおかまー！」

「あんただつておかまじやないー！」のおかまー！」

そういう口調は、字面で見たら誰が誰なのかよく分からないからやめろ、バカどもめ。つて自分もふざけといてつづこむのはあれだな。

「やめろやこの2バカ」

「・・・はあ？俺達は3人揃つてバカだろ？」

「まさか自分が天才だとでも言つつもりか、異ー！」

「少なくともお前らよりは成績がいい」

「そういう減らず口はせめて大きくテストの順位を離してから言つ  
んだな」

・・・義治の言つとおり、俺達はテストの順位も仲良く並んでいる。  
32人中いつも半分くらいの順位なので良くも悪くも無い。

だが、大体は俺が一番最初だ。だから、一番頭がいい！

そして啓輔は大概最後だ。だから、一番頭が悪い！

「悔しかつたら俺を抜いてみせる。この2バカども！」

「むかつく、この無難男！どこにでもいる様な5段階中3番田みた  
いな顔しやがって！」

「義治、その具体的だけど分かりにくい例えはやめろ」

「ここでも俺は“無難”か、やれやれ。

可もなく不可もなく、って言われるのは嫌だ。家族にもそう言われ  
てるからなあ・・・・・・

取り敢えずお前らまとめて犬に尻を噛まれろ！

学校が終わり、遊びに行く事になつた。

「ちょっと待て」

「なんだよ啓輔！勝手に人のポケットに手入れるな！」

「こないだ財布を忘れたのはどこのどちら様ですか？進藤巽君

「あ、あれはもう過ぎた事じゃないか。しつこいぞ」

「人におじらせとしてその言い方、さすがだな。俺は真似できませんね」

・・・俺がしつかり財布を持ってきてれば良かつたんだ。  
友達に迷惑かけちゃいけないよな。

「で、今日はビリ行くんだ

「競争」

「カラオケじゃないのか?」

「そんな金無いだろ。ゴールは隣の駅な。じゃほい、よーいドン!..」

「お、おい待て!今日は金使わないのかよ!」

だつたらなんで人のポケットを確認したんだ、こら待て!  
息を合わせてフライングした啓輔と義治のすぐ後ろに、必死でついていく。

追い越さなきゃいけないんだがここで焦るのは素人だ。  
ゴールまでまだ大分あるし、見失わない程度に追い掛け、寸前で  
追い越すのが賢いやり方だ。

なんて・・・頭では分かつてゐるが、思つた以上に早い2人に追い付くのが精一杯だった。

「どうしたお前ら、いつまで俺の背中を見ている?」「  
「つるせえ!ちょ、調子に乗るなよ啓輔え、はあはあ・・・・!」

くそつ、啓輔の奴なかなか速いじゃないか。

まだ義治は怒鳴る余裕があるみたいだけど、俺は本当に見失わない様にするだけで、他は何も出来そうに無い。

最寄りの駅はどうに過ぎて、隣駅まであと僅かまで迫つてゐる。  
このまま負けるのは面白くないので一生懸命ペダルを漕いだ。  
だが、一向に啓輔との距離は縮まらない。  
見えない壁に阻まれてるみたいだ・・・ちくしょう!..

「ゴール!」

啓輔に続いて僅かな差で義治がゴールし、さらにもう少しづつから  
俺がゴールした。

「ふつふつふつ、さあ・・・何をしてもらおうかな。楽しみにして  
いり

今日も、負けた・・・  
と、まあ、こいつらが俺の友達だ。分かってくれたかな。

（続く）

「これで3回目、ですね。進藤みどりです。  
今日は私の友達を紹介します・・・」

「おっすー！」

ぽんつ、と私の肩を叩く女の子。  
この子はお兄ちゃんが紹介してましたね。  
一ノ瀬由香いちのせゆか。私と同じバスケ部に所属します。  
小学生の頃からの付き合いで、親友なんです。  
見た目は結構女の子らしいんですけど、中身は男です。  
そこら辺にいる男子よりも男です、はい。  
スカートよりもズボンが似合います。

「おはよう、由香」  
「おはようみどりー！」

いつも明るくて、静かであまりしゃべらない私は正反対な子です。  
気が強くて男子とも平気で口喧嘩してしまうんですが、私には真似できません。

私には無いものを持つてて、憧れる部分があります。

・・・大体こんな感じでしょうか、この子が私の一人目の友達です。

「ねえねえ、みどり」

つん、と私の背中をつつく指。

振り向くとここにこ笑っている子がいました。

この子は倉田瞳。いつもおつとりしていて、せつかちな由香とは一、

2、いや3テンポくらい行動が遅いです。

学食だと必ず迷って決めるのは一番最後になつちやつて、いつも由香に怒られます。

おしゃれするのが好きで、巻き髪です。

「うーーっす」

「あたつーちよ、いらそこの不良ーいきなり人にエルボーがますなー！」

挨拶代わりに由香に肘鉄を食らわせたのは、大崎絵梨佳。

私達4人の中では一番派手な子で、唯一髪を染めています。

白に近い金髪でぱつちりメイクもします。

見た目はもつと田立つグループにいそうな感じです。

でも言葉遣いは普通だし、話してると良く笑わせてくれたりするから楽しいです。

特に由香がお気に入りらしくて、いつもイタズラばかり仕掛けでます。

「みどり、私1限目は寝るから後でノート見せてね」

「こら、そこの不良！謝れ！」

「なんか言つた？瞳」

「うん、誰だうね？」

絵梨佳と一緒になつてふざける瞳に、由香は歯軋りして飛び掛かりました。

「うーだー私はここにいるー！」

「うるわこ耳だなあ～

遊ばれながらも、由香は嬉しそうです。

宣言した通り、絵梨佳はぐっすり寝ていました。

そして、1限目終了のチャイムを耳覚ましたとして起きました。

「ふあああ～・・・あー良くな寝た」

眠そうにボリボリ髪を搔きながら私の所にやつてきたり・・・

「みどり、ノート見せて」

「・・・・・・・これ」

「サンキュー」

にっこり笑つて、絵梨佳は10円で買えるチラシを幾つか机に置きました。

基本的に和菓子が好きですが、こうのものも好きです。

これはデザートにしよう。あとでゆっくり食べよう。

「ん！」

由香が絵梨佳に駆け寄り、満面の笑顔で手を差し出しました。

「・・・・・何よ？」

「私にもちょうどいい！」

「あるけどやんない」

「何で！友達なのになくれないの？」

「あのや、みどりはノート見せてくれたからお礼にあげたの。何もしないでもらうなんて、虫がいいわよ」

「それがさつき人の胸にエルボー食らわせた奴の言つことなの？い

「からちゅうだい」

「うそ、そうだ。君の話は一理あるぞ由香。でもあれは挨拶だからね」

まともに取り合おうとしない絵梨佳が気に入らないのか、由香は食い下がります。

「くれるまでここを動かなこぞー！」

ついには絵梨佳の机にお尻を乗せて、軽い籠城を始めてしまいました。

「わ、まるで子供みたい。

「やれやれだぜ。たかがお菓子ひとつ何故こゝまでひたむきになれるかなあ。由香は純粋だね」

「無視無視無視無視・・・」

「こつまで重いケツ乗せてんのよ。もつすぐ限日始まっちゃうけど?」

「無反応無反応無反応無反応・・・」

言葉に出したら無視してる事にならないんじゃないの、由香?

・・・わ、変な所は頑固なんだから。

その後チャイムが鳴つて一旦は自分の席に戻りました。

でも、納得いってなさそうな顔をしています。

お昼休みになると、また由香が絵梨佳に突っ掛かり始めました。

「チヨコレートよこせー!」

「いいよ。でも私にも何かしてくんないとやだ」

「うるさいーお前みたいな不良にやるものなんか無いぞ!」

「ふうーん、じゃ」ひさかわやんな」

まつたぐ、いつまでやつてるんだか。  
でもきっと由香はもう引き下がれないんだろうなあ。自分から吹っ  
かけちゃつたし……

「・・・腕相撲しない?」

「いいけど」

「それで私が勝つたらチヨンを全部貰いつ」

「私が勝つたら?」

「明日の『』飯奢る!」

2人の勝負が始まったので、私と瞳は出したお弁当を一度引っ込みました。

由香が絵梨佳に勝負を挑むのはよくある事なので、私と瞳がそのリングを作るのは慣れています。

「よーし、いくよ絵梨佳」

「懲りないよね由香、毎回」

「見合つて見合つて、はつけよこのじつた!」

瞳のちよつと変な掛け声を合図に、腕相撲が始まりました。

最初は由香も絵梨佳も半笑いでしたが、すぐに表情が変わっていきます。

ちなみに、もう説明したと思いますが由香はバスケ部所属です。  
で、絵梨佳は特に何もしていません。いわゆる帰宅部という名前の急け者です。

どちらの力が強いのかはもうお分かりですかね……?

にも関わらず手は結び合つたまま、微動だにしません。

じぱらくして絵梨佳はそのままでは勝てないとみたのか、変な顔をしました。

多分これはマントヒビの顔真似です。

絵梨佳は可愛いけど躊躇わざううして変な顔をするのです・・・

由香はもう見てしまい、今にも吹き出しそうです。普段でもよく笑いますから尚更辛いでしょうね。

卷之五十一

・・・こんな勝ち方、するい。

「残念だったな由香」

「Jの卑怯者！あんな顔きたねえぞ！」

どうですか？

この子達が私の友達です。

続く

## 19・黄児の友達

おっす！…はじめまして、だよな？

おれ、進藤黄児！！

なんか今日は自分の友達を紹介するみたいなんで、よろしくな…！  
たつにいやみどねえの友達も楽しくていいやつばっかりだけど、お  
れの友達もみんないいやつだぞ。  
とにかく遊んでて楽しいんだ。

特に仲良しなのが3人いるから1人ずつ紹介する…！

まず1人目のこといつ。

吉川秋宏よしかわあきひろ

おれと同じくらい声がでかくてよくしゃべるやつだ。  
運動神経が良くてサッカークラブに入ってる。

「おい、黄児！早く校庭行こうぜ！」

「よーしどっちが早いか勝負だ！」

あれと秋宏は並んで、よーいどんと教室から飛び出した。  
すると、すかさずおれ達を軽々と追い抜いていったヤツがいた。

「この勝負、のつたぜ。俺が勝つたら今日1日王さまだぞ！」

「お、王さま？何か知らないがえらいのか？」

「当たり前だ。お前ら、俺が王さまになつたら1日こいつとを聞く  
んだぞ！」

そうか、だつたら負けられないぞ…！

あ、紹介してなかつた。

おれと秋宏を抜いていつたこいつは、飯村冬司。  
ちよつと自分勝手でマイペースなやつなんだけど、足はおれ達より  
も速い。

負けるもんか、校庭まではまだあるー。

おれと秋宏と冬司はほほ並んで同時に玄関を飛び出した。

「みんな遅ーー」「げっ？！も、もう『ゴールしてたのかよ？！』  
「いつからいたんだ！！」「秋宏が競争しようつて言つた時、最初に飛び出したよ」  
「そんな・・・俺より速かったのかよお」「早い者勝ちだよ」

落ち込んでいる冬司の肩を得意げに叩く女の子。  
こいつが、三人目の友達だ。

小松春菜。  
こまつはるな

おれ達の中じやー一番かつちやーのに、元気いっぱいだ。

「さあ、私が王さまだよ。みんなりちゃんと命令を聞きなせこ  
「するいぞ春菜ー！」  
「みんなに気付かれない様にするなんて反則だぞー！」  
「こつも思つてるけど、その『カイリボン似合つてないぞ』

春菜はじろつとおれ達を睨み付けて、冬司の足を踏ん付けた。  
リボンの悪口が許せなかつたらしい。

「今日おまえ」とじみつ。

「やだ、おれサッカーしたい」

「俺も黄司に賛成！」

「おまえ」となんて座ってるだけじゃん、つまんない。

「王さまは私だよ！ はー、じゃあいつから来てみんなー！」

砂場に連れてこられたおれ達は、そこへ座られた。

仕方ないか、王さまの命令は絶対だ・・・ってあかねえが言つてた。

「私がママで、秋宏がパパ。で、黄児はお兄ちゃん。」

「俺は？」

「反抗的な冬司は弟ね。一番年下だからみんなのいつとを聞くの

「やだー、やういたくなー。」

おれもあんまり乗り気じゃない。

でも、あかねえが女の方には優しくして言つから、その通りにしよ。

「母ちやん腹へつたぞー！ 飯まだか？！」

「母ちやんじやなくてママと言こなせー。」 と聞かないといふ飯

あげないわよ

「おれの母ちやんはそんな意地悪じやなこぞー。いつも優しいんだからなー。」

「うひのママ、母ちやんなんて言い方したら怒るもん。」 ひとママ

「ママで言わなきゃいけないんだもん」

「む・・・わ、わかつたよ！ かあ・・・こや、ま、ママー、腹へつたぞー。」

変な言い方だな。

おれはもちろん、あかねえもそうこうも、たつにこもみどねえも、

ママなんて呼んだ事ないから。

「ほこどりー、黄児お兄ちゃん」

春菜は用意していたお茶碗に砂を大量に盛つて出した。

・・・何これ？砂じやん。

おままでとなのは分かつてゐるけどなんかイヤだな、これ。

「ほんなの食えないぞ母ちゃん！」

「おままでとなんだから食べるふりでいいの。つていうか、また母ちゃんつて言つたね」

「他の遊びにしようぜ春菜。もつと樂しく命令にしてくれよ」

「聞いてんのかこのリボン女、ぐはつ？！」

春菜は冬向に正拳突きをしながら、考えている。  
さあ次はどんな命令が来るかな。出来ればサッカーがいいな、おれ

は。

しばらく考えてから春菜はそつと口を開いた。

「じゃあ、鬼！」

そんなの、ただ走るだけじゃないか。

太つてたつて足の速さには自信がある。

でも、冬向に勝てるかな。あいつ速いし、特に逃げ足は速いからな。  
もし鬼になつたら大変だぞ。

「じゃんけんで決めようーーの、じゃーんけん、ほん！」

春菜の合図で一斉に手を出した。

おれはパー。

秋宏もパー。

春菜もパー、そして冬司はチヨキ。

ウソだろ？！こんなあつさつ決まるなんて！

まずい逃げなきや。

よりもよつて一番速い冬司が鬼になるなんて！

「よし、じゃあ10秒待つてやる。次に捕まつたヤツが鬼だからな

今のうちにできる限り逃げなくちゃ。

なあに、大丈夫さ。兄弟の中じゃおれが一番速いんだからなーー！  
そんな体のくせに、とよくあかねえやたつにに言われるけど、大  
きなお世話だーー！

「いーす、にーい、せーん・・・・・・」

10秒は短い。

余裕ができる様にもつと早く逃げなきや・・・・・・

「じゅうつーーーーーお前達ーーーー

あ、あれつ？！

なんかいきなり飛んだぞ？！

おれの空耳か？

「おい、するじぞ冬司ーしつかり数えろー！」

「これが俺の数え方さ。いち、二、さん、じゅうつーーーー

またズルした。冬司は負けず嫌いだからじょつがないけど、やつぱりズルはダメだよな。

しょうがない、鬼ごっこのルールを変えよう。  
おれと秋宏と春菜は顔を見合させて、うなずいた。  
よし、ちゃんとみんな同じ事を考えてるみたいだな。

追い掛けてくる冬司を、3方向から一斉に走つて追い詰めていく。  
最初は笑っていたけど、すぐに逃げ出そうと背中を向けた。  
そこで最初に秋宏が飛び掛かり押さえつける。

次に春菜も冬司を押さえた。さあ、最後はおれだ。

「ズルはいけないんだぞ！」  
「ぐああああつ？！」

思い切り体当たりしたら、冬司は白由を剥いて倒れこんだ。  
おれはヒーローになる。だから、こんなズルは許さないんだぞ！

～ 続く～

「つづいて、だね。  
進藤蒼太です。よろしく。

異もみどりも、そして黄児もなかなかいい友達に恵まれてるよね。  
俺にも友達はいるんだけど、これがなかなか・・・  
ちょっと変わってるというか、普通と呼ぶには少々変わりすぎている  
というか・・・・・・

・・・居た。

あそこだ、”彼女”がいる場所は。  
いつもカラスが寄つてくるからすぐに分かる。  
それにも、毎回よくたかるよな。

カラスの邪魔をしない様に、彼女の所に近づく。

「おはよう、<sup>まつり</sup>祭」

祭はベンチに座り込み、投げ出した長い足に肘を乗せてすやすや眠  
つていた。

服装にはそれなりに気を使つてゐつもりだけど、俺は祭の様な格好  
は出来そうに無い。

この黒いドレスの様な服はゴスロリ、といふらしい。  
更に真つ青に染めた長い髪を真つ赤なりボンでツインテールにして  
おり、服装も相まってとにかく構内のどこにいても目立つ。

「祭、早く起きるんだ」

寝ているのを邪魔するのは気が引けるが、もつ間もなく講義が始まるので放置するわけにはいかない。

それに・・・なんだかんだでもう1年の付き合いになるのだから、この外見にも少しは慣れた。

「はっ！！」

「うわっ？！」

急に祭が起きたので、ベンチから転がり落ちそうになつた。この大きく目を見開いた顔には未だに慣れない。

「・・・・・蒼太か、いつから居たのだ」

「今來たところだよ」

「そうか。喜べ、我はたつた今お主がカラスに集られる夢を見ていた」

妙な言葉遣いには慣れたけど、こいつ発言はどう受け取つたらいのか未だに分からない。

祭が常に纏う暗黒のオーラにはカラスの大群が似合つ。

彼女は、立花祭。  
たちばなまつり

俺の友人の1人。

見ての通り、ちょっと変わつた人間だ。

「不幸の象徴の中で輝くお主の姿・・・まばゆい光。今日は大吉なり、クツクツクツ」

「早く行かないと遅刻するぞ」

「・・・まあ、いつもの事だ。実にお主は運が良いな」

なるほど、運が良いのか。

しかし夢の中とはいってもカラスに集られるのは・・・  
祭曰く、俺には色んな人を引き付けるオーラがあるらしい。  
あんまり意識した事は無いけど考えてみたら、小中高とクラスで話  
さなかつた同級生はいなかつた。

異に以前「兄貴は話しやすいよな」と言われたけど、そう言つてくれると嬉しい。

祭が窓際に座ると、ちょうど生えている木にカラスがとまつた。  
そして、光に集まる虫の様に一羽、また一羽と次々に集まってくる。  
やつぱり不気味だな・・・なんで揃つてこつちを見てるんだ。

「わつ?！」

すると、窓からいきなり人の顔が出てきた。  
こつちを見るなり窓ガラスを叩いている。開ける、という催促だな。  
・・・ちなみにこの講堂は3階だ。

「よひ、蒼太、祭!」

またエレベーターを使わずに登つてきたのか。  
せめて階段を使えばいいのに。

「おはよひ、翔一」

「たまにはドアから入つたらどうだ、そこの野蛮人」「エレベーター嫌いなんだ。言わなかつたか?祭

こいつも俺の友達。

蒲生翔一。

好きなもの、トレーニングとプロテイン。  
嫌いなもの、楽なものと狭いところ。

最初に会つた時の自己紹介をそのまま言つたけど、これだけで彼がどんな人物なのか大体把握できた。

「・・・講義を受ける前に拭け。」の阿呆め

祭が鼻を押えながらフリルのついたハンカチを翔一に手渡す。  
また家から走つてきたんだな。

「悪いな、洗つて返すよ」

遠慮せずに置んだハンカチを広げて顔を拭く翔一に、祭は眉間に刻まれたシワを深くした。

祭はいつもカラスを連れてているのと同様、翔一は汗を身に纏いプロテインをお供にしている。

それが俺の、それぞれに対するイメージだ。

何かに例えるとしたら祭は闇で翔一は火だ。

対照的な性格なので、祭は翔一とはあまり絡もうとしない。  
しかし翔一はそんなお構い無しで・・・というか気付いていない様な気がする。

さて、あともう1人よく話す友達がいるんだが、今朝はまだ見てないな。

あいつは時間通りに登校出来たら奇跡だから、遅れて来るかもしれないな・・・・・

「間に合つたか！」

すると、講堂内に大きな声を響かせて入ってきた。

・・・凶暴な友達を連れて。

「おっ、蒼太！翔一、祭！隣いいか？」

「バカ野郎！その犬を外に出してから来い！」

「そうだった、なんとかしてくれ。何か知らないが駅からずっと追掛けてくるんだ」

あんまり人がいない講義で助かつた。

とはいって、他の生徒は突然の乱入者、もとい犬に騒然としている。仕方ないので何とか宥めながら、学校の外まで誘導してやつた。意外とすぐに大人しくなり出てくれたので、助かつた。

またあいつが呼び込んだか。

講堂に戻るとちやつかり俺の隣に座りながら、祭に治療させていた。汚れた顔を拭いてもらつていたが、俺に気付き片手で挨拶している。

「よつ、蒼太。さつきもしたか？まあいいや。いやいや参つたよ、尻尾踏んだらずつと追い掛けてきてさ」

「毎度ながらお主の不運さは笑えてくるな、クツクツクツ」

「そう言つなよ、お陰で学校には間に合つたんだからな」

八十場晶。  
やまとあきひ

幸運を表す末広がりの8が名字でありながら、周囲の災厄を引き寄せてしまつ。

常に付きまとうものは不幸だ。

カラスを引き寄せる立花祭。たちばなまつり。

汗を身にまと蒲生翔一。がもうしょういち。

そして、不幸を引き寄せる八十場晶。やそばあきら。

少なくとも、こんな奴らは今までの人生で出会った事が無い。

大学生になつてから変な意味で考え方があつたといふか、視野が広がつた。

この世にはいろいろな人間がいるんだな、と思う。

まだ先の話かもしれないが、俺はこれからどんな人間に出会うのだろう。

「お主に我の不幸も背負つてもらいたいものだな」

「冗談じゃねえ。2人分も貰つたら命が足りねえよ」

退屈はしないが、時々平穀が欲しくなる -

（続く）

さて、俺達兄弟の友達紹介は前回でひとまずおしまった。

・・・え？まだ姉ちゃんが終わってないって？

よく分からぬけど嫌なんだってわ。

語り手を勤めてもお手当でが出ないならしない、とか言つてた。  
嫌な野郎だらあいつ。そういう問題じゃないよな、みんな。  
ふつ、だがこれでもし人気が落ちても、あなたの言葉を借りるなら  
自己責任つてやつだぜ。

この先出番減つても知らないからな、俺は。

俺の心の愚痴もどこ吹く風といった様子で、朝起きたら姉ちゃんが  
隣に寝ていた。

・・・またか。最近は特に酷いな。

なんで弟の部屋で寝てるんだと聞いたら、自室に戻るのが面倒だか  
ら、らしき。

あと、俺の布団の方が肌触りがいいとも言つていた。

「おー、そこの変態」

俺の呼び掛けにも全く反応せず、汚らしい鼾をかけて夢の世界に漫  
つている姉ちゃん。

「邪魔だ、自分のところで寝ろよ」

「・・・・・・・・・・・・」

よつやく田を覚ましたのか鼾が止まつた。  
しかし、田を開けず起き上がるつともしない。

「おこ、姉ちやん

不愉快だ。

隣にいるだけでも苛々するのと、無防備な下着姿なのが更に腹立だしい。

好きな色は服どひか下着まで赤とかふぞけてるのか？

その時、階段を上がる足音が聞こえてきた。

母さんか・・・いや違つ。速さが倍くらうある。

黄児かと思つたが、重さがちこちある感じじやない。じゃあ一体誰だ？

足音は俺の部屋の前で止まり、それと同時にドアが・・・

「おこ異、こつまで寝てんだ！せつかく遊びに来てやつ

開けた主は言い終わる前にフリースしてしまつた。

それは、じつも同じだ。

「な・・・な・・・何やつてんだよお・・・

「こやこやいや違つ！これは誤解だ！」

やつてきたのは一ノ瀬由香。  
（いちのせゆか）

幼なじみであり、みどりの親友でもあるがセつな女だ。

姉ちゃんとも親しいんだが、こつこう場面を田の当たりにするのは初めてだつたよな。

「よつ、由香。朝も早よから元氣だねえ

「あ、ああ紅音さん！お取り込み中ごめんなさいです！！」

「取り込んではいるが別の意味だ。おい由香、聞いてくれ

「お前と話す事は無いー！」の変態ヤローー。」

勝手に入ろうとして勝手にまたドア閉めて、騒がしい奴だ。  
とにかく着替えよう。

「ウフフフ、あの子には刺激が強すぎたかしら」

「起きるな。今日は部屋から出るなよ」

「ただの誤解よね。あんたが寂しいから一緒に寝てってしつこくして、  
仕方なくそうしたのに」

「酒臭いからもう喋るな」

わいつわと着替えて飛び出す様に部屋を出ると、今度は啓輔に会った。

「悪いな、由香がいきなり押し掛けよ」

「あいつ絶対ノックしないんだな。何遍言つてもしようがないからもう諦めた」

「・・・邪魔してすまないな」

「おこ、由香からどんな説明を受けたんだ?」

「紅音さんと抱き合つてたつて・・・本当にすまん。せめて終わつてから入れつて言つといった」

啓輔は姉ちゃんの変な部分を分かつて冗談を言つてこる。

だが、由香はあまり知らないので本気にしそうだな。  
一緒に降りると由香が座つていたが、俺と田を合わせようとしたしない。

「すいませんおばさん、朝からつるむくしけやつて」

「いいのよ。異は起こさないとずっと寝てるから」

「・・・今度から私、來ても外で待つてます」

その言葉に母さんは首を傾げていたが、由香はそれ以上何も言わなかつた。

家を出ると、冷たい風が吹き付けてくる。

「由香、あれは違うぞ。姉ちゃんが勝手に俺のベッドで寝てたんだ」

「ふうーん・・・・」

一応目を見ていたが、まるで気の無い返事が返ってきた。

「本当だぞ、由香。あの人は寝やすい場所を探すべせがあるんだよ」「ふうーん・・・・・・」

啓輔のフォローに対しても間延びした返事しかしていない。  
そもそも、なんで俺を責めるんだよ。同じ女だから姉ちゃんを咎めないのかも知れないが、少しだけ疑え。

「ま、そういう事にしどいてやるか。早く遊ぼうぜ異業

由香は持っていたボールをドリブルし始めた。  
駅の近くにあるこの小さなバスケットコートが、俺達の主な遊び場だ。

早朝の静かな空間に、ボールが跳ねるリズムが響く。

「取つてみな、異。なんなら兄貴と二人がかりでもいいよ?」「いいのか、そんな大きな口をきいても」

・・・それだけの実力があるのは分かつてゐるさ、由香。

俺よりも近くにいてそれを知っている啓輔は、苦笑いしながら離れた場所で見ている。

適うわけないじゃないか。でも、挑まれたら逃げる訳にはいかないな。

由香はドリブルしながらいつでも飛び出せる様に構えている。

さあ、右か左か、どっちから来るつもりだ？  
しばらく待っていたがなかなか由香が動き出さないので、つい田を離してしまった。

その一瞬の隙をついて俺の横を擦り・・・

「あつーーー！」

振り返ると、ふわりと浮かびながらゴールに球を投げ入れる由香が見えた。

俺を抜いてもまだ距離があるはずなのに、いつの間に詰めてたんだ？  
ははっ、やっぱり鍛えてる奴には適わないよな。

「もう1回やるうぜ」

「悪いがこれはもうバス。素人に勝つても面白くないだろ？」

「私だってプロジェクトじゃないし」

「そういう意味じゃない。俺はバスケに関しては体育でしかやった事が無いんだよ」

「ちえ、ノリ悪いの。じゃあショートやるうぜ」

今度は啓輔も参加してきた。

ボールがひとつしかないので、順番でショートしながら交代していく。

最初は由香、啓輔、最後に俺でまた由香からだ。

由香はいきなり3Pショートを打つが当然入る訳もなく、続いて啓輔も失敗した。

「よし、俺もやってみるか」

「無理だよ異、もし入ったら弟子入りしてやるから」

バカにしやがつて。

見てろ、俺だつてやれば・・・

「あつ？！」

「ウソ？！」

・・・入つた。

吸い寄せられるみたいに、綺麗に入つたぞ。

「こ、今度な！今日はただの友達！」

「由香、約束は守れよ」

次に会う時は俺が師匠か・・・・・威儀を出す為に髪を伸ばして灰色に染めて、三三編みにでもしどうかな。

（続く）

## 22・蒼太と祭

何やら騒がしいと思つたら異が友達と遊びに出かけたらし!。  
奇遇だな、俺も今日は誘われているんだ。

しかし・・・妙に緊張するものだな。

いつもの面子ではなく、あいつと2人きりで遊ぶからだな。

~~~~~

「・・・いつもと同じだ」

アパートの前の木にカラスが集つてゐる。

見慣れたはずなのに、改めて見ると不思議な光景だと思つ。カラス達に見守られながら2階の一一番端にある部屋の呼び鈴を鳴らした。

すると指を離した直後にドアが開き、あいつが顔を見せる。

「で、出迎えが早いな」

「お主は我の友の中で唯一遅刻せぬからな。そりそろ来ると思つていた」

女の子の部屋に呼ばれる。

考えてみたら普通にいいシチュエーションなんだけど、それは相手がまともな場合に限るね。

真つ青な髪にいつもゴスロリを身にまとい、出来損ないの時代劇みたいな口調の異性は・・・

まあ、慣れたけどね。

「上がれ。茶菓子の用意もしてあるぞ」

しかし祭・・・家中の中でも「ゴスロリ」なのか。  
これももう慣れたといえばそれまでだけどな・・・・・・

最初にここに来た時は翔一と晶も一緒に、部屋を見た感想は揃つて  
「オセロみたい」だった。

床や壁は黒いカーテンやカーペットで塗り潰されており、テーブル  
やベッド、洋服棚等の家具類は白で統一されている。  
彼女の外見からもつと黒魔術的な部屋を想像していたので、仲良く  
肩透かしを食らつたのを思い出す。

白いテーブルに置かれた白いマグカップと、堅焼き煎餅。  
コーヒーと煎餅・・・・・祭の独特なセンスが為せる組み合わせ  
だな。

「ちゃんと食べられる物で安心したよ」

「それはどういう意味だ、蒼太」

「祭の事だから調理した虫を出すのかと思つた」

「・・・友にゲテモノを出す間抜けが何処にあるのだ」

怒らせちゃったかな、すまない祭。

祭は普段は表情をあまり変える事が無い。笑う時に唇を歪めるくら  
いで、目元は殆ど動かないのだ。

果たして今日は何をして遊ぶのだらう。

「我の忠告は覚えているか?」

「えつ、何の事？」

「やれやれ、つい一昨日の記憶も無いのか。お主の頭脳は鳥といい勝負だな」

「ああ・・・そういえば」

先日、祭が学食で手羽先の骨を噉み砕きながら言っていたのを思い出した。

だが話の内容より、眞顔で咀嚼するその仕草の方が記憶に残ついたらしく。

「近い内、お主に災厄が訪れようとしている。と、食事の際に申した筈だ」

食べながら話していたから重大な事では無いと思い、聞き流していった。

祭は時折翔一や晶にも受難の預言をしてくる。

良く当たるのだが歩きながらつまづいたり、道端の猫に猫パンチされたりする程度の地味な災難ばかりなので、その内気にしなくなつた。

的中したとしても取るに足らない事ばかりだからね・・・

俺が記憶に留めていないのも、今までの経緯が原因だ。

「だから、お主が災難に見舞われぬ様に我が守護してやる」

「・・・前から思つてたんだけど、そつこいつのつてなんで分かるんだ？」

「お主には見えぬのか?」が体から噴き出していく、常闇の妖気が・

・・・

「えつ?！」

「いい反応だな。それ程敏感ならばいずれ目視出来る様になる、ク

ツクツクツ。我的気持ちが理解できよつた

一瞬からかわれてるのかと思つたが、祭は「冗談が上手いタイプではない。

何じろ常に真顔だ。

きっと寝る時もその臉が降りる事は無いだろ？

……いや、この間学校で寝てた時はちゃんと閉じていたはずだな。

「それでわざわざ休みに呼び出したのか」

「……何を期待していた。休日に異性の血肉に招かれ、破廉恥な欲望を抱いていたか。この猿めが

「…………敢えて否定はしないよ」

「お主は我の親しき友。災厄から身を護りたいと考えるのは当然だろ？」

「ありがとう。それで、俺はどんな目に遭うんだ？」

祭は唇を開けたまま黙つた。

能面の様に殆ど動かない目が微かに泳いでいる。

「蒼太よ、現世には知らぬが仏という諺がある。お主は賢い男のはずだが

やめろ……祭。

声が一回り小さくなつた理由を知りたくない。

「ならば聞かない。お祓いでも何でもいいから、早く済ませてくれ」「話が早くて助かる。ではまず口を閉じよ

言われるまま口を閉じた。

さあ、次は何が起きるのだろう。

もしこれが祭なりの遊び方だとしても、別に悪い気はしなかつた。

ちょっと変わっているけど、彼女なりに俺を心配してくれているのは嬉しかったからだ。

「今から呪文を唱えるが、いいと申すまで決して目を開けるで無いぞ。対象を暗闇の中に置かなければ、効果が無いのだからな」

「うん、分かった

本当の祭は他人に優しい。

不幸を引き寄せてしまう晶の事を良く笑っているが、その境遇に興味深いからであって、決して小馬鹿にしている訳ではない。

祭が深く息を吸い込むのが聞こえた。呪文を唱えるための準備だろう。

「んもーおー！私の友達を狙うぞ！」の悪霊さん……早く立ち去りなさいよお……」

祭の発した謎の言葉に度胆を抜かれて、反射的に目を開けてしまった。

「蒼太、我が合図するまで目を開けるなど申したはずだぞ」

「ま、まつ、祭、いい、今のはなんだ？」

「お主は人の話を聞いていたのか。右の耳から左に抜けていく器用者だったとはな」

・・・い、今のが呪文？

普通に喋ってただけじゃないのか？

「妖気が見えなくなつた」

「え、じゃあ俺はもうお祓いが済んだのか？」

「・・・消えたとは限らぬ。我には目視出来なくなつただけだ」

「じゃあ・・・もつ災難は訪れないんだな、安心していいのか。

「油断するなよ蒼太。災難は炮と同じ、本人の都合に田もくれず現れる」

「わかつたよ、ありがとう祭」

祭は少々唇をもじりさせながら、軽く会釈した。

にしてもあれが呪文・・・寧ろ普段の口調の方がそれっぽい様な・・

（続く）

## 23・異のイブイブ

もうすぐクリスマス。

だが、それが何だ？生まれてから今までの17年間、特別な過ごし方をした事は一度も無いね。

啓輔と義治で予算を出し合いで、クリスマスケーキを買える限り購入する。

そして早食い競争をして夕飯が入らなくなり、家族に怒られる。

今年もきっとそんなクリスマスになるだろうな。

後先考えずにバカな遊びをする、いつもと変わらない1日になるだろつ。

今日は2日前のイブイブ。クリスマスイブの前日だ。  
まだ俺が子供の頃には無かつたはずなんだけど、一体いつ誰が決めたんだろうな？

「・・・・」

ノックだ、誰だろ？こんな朝早くから。

と言つてももう9時近い。

この控え目な叩き方は姉ちゃんでも黄児でも無いな。

「起きてる？」

「んっ、ああ。用か？」

「入つてもいい？」

ゆっくりドアを開けて、みどりが入ってきた。

モスグリーンのコートを羽織り黄色のマフラーを巻いている。

「どこか行くのか」

「・・・うん」

「なんだ、一人で行くのか。寂しいな」

「それはお兄ちゃんの返事次第かな」

へえ、じゃあお兄ちゃんは一緒に行くと言つてやらないでいいやな。  
そうじやなくちゃ優しくない・・・・

「なんだその言い回しは?」

みどりはくらくらしている。

こいつ、こんな変な言い方する様なヤツだったつけ?

「今日はイブイブだからお出かけしよう」

今度は直接的な言い方で来たか。

どうしようかな・・・・

別に予定は無いんだけど、今日はイブイブだから妹と出かけるのは  
ちょっと恥ずかしい。

何故なら今日はイブイブだから、だ。

2回も思うとこの事は結構意識しちゃってるのか?  
いやいや、だつて妹だぞ。

別に恥じらつ必要なんて無いよな。

「いいぞ」

「ほ、本当に?..」

「自分から誘つたくせに驚くなよ」

「だつて断られるつて思つたから・・・」

着替えようとしたが丑うといひのとじないので、覗きの趣味があるのかと  
聞いた。

するとみどりは顔を真っ赤にして出ていった。

街はすっかりクリスマスマスームードに包まれている。

みどりに誘われるままに来てしまったが、すれ違うのはカップルばかりで早くも後悔し始めた。

やつぱり今日は家にいれば良かったよなあ・・・・・・

「お兄ちゃん、寒くない？」

「いや、別に」

「手とか力チカチじゃない？ 手袋してないから・・・」

「んつ、ああ、そうだな」

まだ外に出たばかりなんだが早くも指先の感覚が無くなり始める。

やつぱり、手袋ぐらこきちゃんと用意しておけば良かったかもな。  
みどりはマフラーとお揃いのをしている。

「・・・おこ」

「これなら暖くない・・・・・・でしょ」

もう高校生だぞ、俺達。

ビビの世界にローテイーン同士で仲良く手を繋ぐ兄妹がいるんだよ？

「・・・同じ風に見えるかな・・・」

みどりは、近くを歩いている手を繋いだカップルを見ながら何か咳いている。

最近独り言が多くなってきたな。でもトーンが小さくて聞き取れない

いで。

しかし・・・聞かない方がいい様な氣もするんだよなあ。

「みどり、ゆっくり歩けよ」

「・・・・・・・・・・」

「聞こてるか? おい、みどり」

急にみどりの歩くテンポが速くなつてしまづきだつになる。

「びしに行くんだよ、おい」

黙つて何も言わなかつたが、向かう先で目的地を察する。駅前のショッピングモールか。一度行きたかつたんだよな。ビルに入った瞬間クリスマスソングが流れてきた。それに合わせて鼻歌を歌いながらエスカレーターに乗る。

「買いたい物もあるのか」

「・・・・・・・・」

だんまりは困るんだよなあ。

そりやみどりは大人しいけど、いつもなら最低限の返事くらいはする。

変なヤツだなあ・・・せつきから顔も赤いし、どうかしたのか。みどりに手を握られたまま3階までやつてきた。

「・・・・」

なるほど、映画を見たかったんだな。

だつたら最初からそう言えば良かつたのに。

さあ、お前は何を見るつもりなんだ？

俺は別にどんなのでいいけどな。いい暇潰しなりそうだから。

・・・・・まずい。

ポップコーンではなくて、この状況だ。

もう間もなく空っぽになっちゃう。

何でもいいとは確かに言つたけど、やはりみどりと趣味が合ってないに無い。

つまらない。見ていて退屈だからポップコーンに逃避してたんだが、もう無くなりそうだ。

だから嫌でもスクリーンと対峙しなきゃならない。

(はあ・・・)

最後のひとつを口の中に放り込み、カップを下に置いた。

仕方ねえ、寝るか。

みどりに後で何処が良かったか聞かれたら、全部良すぎてどれも見所だったと言つところ。

(・・・ん?)

手を、ちょっと堅くて暖かい感触が包み込む。

それはみどりの手だった。

注意しようとしたが映画に魅入つていて、声をかけづらい。

仕方ないのでスクリーンに目線を移すと、ちゅうび男と女が額をくっつけ合っていた。

顔がとても近い。こりやもしかして・・・いくか？

や、やるのか、あれをやつてしまふのか？

でも、何秒待つても2人は唇を重ね合ひ事は無かつた。

揃つて目を閉じ幸せそうに微笑んでいる。

ふう・・・良かつた。

この話は全年齢対象だけど、別にキスくらいなら規制に引っ掛からないんだぜ？

まあいか。この映画は純愛がテーマらしいし、気持ちが繋がっているのが大事なんだろうな。

(・・・いつまで握ってるんだ、みどり)

とっくにそのシーンは終わったのに、まだみどりは手を握つたままだ。

・・・・・やめろと囁つタイミングを逃した様な気がして、言いだせなかつた。

みどり・・・恥ずかしいよ。

気付いてないのか？自分が何をしてるのか。

終わつてショッピングモールから出た後、俺達は手を繋いでいなかつた。

話をしたのは家に帰つてからだつた。

そういうや、こないだ雨が降つた時も様子がおかしかつたよな。でも・・・嫌な気分じゃない。胸がやけに温い。どうしてだろうな？

（続く）

## 24・銀太郎はサンタクロース

今日はクリスマスイブ。

でも、だからって特別な日では無い・・・昨日も言つたつけ？

昨日と今日、そして明日、3日間とも予定の入つてゐる姉ちゃんと兄貴は帰りが遅い。

姉ちゃんはクリスマスセールで忙しく、兄貴は昨日から3連続でバイトだ。

ちゅうじ明日、クリスマスから冬休みが始まる。

啓輔や義治と適当に遊んで暗くなる前に帰ってきた。

「・・・おつ

リビングにクリスマスツリーが飾られている。

今朝はまだ無かったのに誰がやつてくれたんだね？

「お帰り巽

「父さん！」

なんだか、久々に会つた気がする。

いつもの作務衣も今日はサンタクローススカラーだ。

「イブくらこはちちゃんと空けておかないとな」

父さん、ちゅうじと嬉しそうだな。

昨日のみどりもそうだけど、家族はみんな浮き足立つてゐる。でも浮かれるのは悪い事じゃないよな。1年に一度しかないイベントだから。

・・・あ、クリスマス関連は3冊あるんだった。しかも今日はまだ前夜祭か。

昨日はみどりと映画を観に行つたし今日はお祝いするし、明日にはもう燃え尽きてそうな予感がしてならない。

「あのツリーって誰が飾り付けたの？」

「俺だ。どうだ、うまく出来てるか？」

「1人でやつたのか？！」

ツリー 자체はそれほど高くないのは見て分かる。

でも、キラキラした紙や玉の飾りがいくつも付けられており、1人でやつたとしたらかなり大変だったはずだ。

「ただいま・・・あ、お父さん。おはよう」

「おう、みどり。今日はずっと起きてたぞ」

「わあ・・・綺麗だね」

みどりもツリーに見惚れている。

これを今日と明日だけしか飾らないのは勿体ない気がした。

「父さん、あのさ」

「なんだ？」

「来年だけ門松をこれにしないか？」

「はっはっはっ、いいボケをかますな異は。素質があるぞ」

「うん、わりと本気だ」

父さんは手先が器用でちょっととしたものなら作れてしまう。

俺にはその手の才能は多分無いのでうらやましい。

姉ちゃんや兄貴は受け継いだみたいだから、本当にうらやましいよ。さて、もう寝る時間だ。

イブだからって昨日みたいにドキドキする事は無かつたな。  
みどりのヤツずっと手を握つてたけど、いつたい何を考えてるんだ  
か分からん。

今日は夕飯にチキンが出たくらいで普段と変わらなかつた。  
明日はケーキが出るから楽しみはそれくらいだな。

「なあたつにい、サンタさんいつ来るかな？」  
「起きてたら来ないだろうな」  
「じやあもう寝るか！おやすみたつこーーー！」

黄児と別れて部屋に戻る。

あと30分くらいでもう日付が変わるな。  
冬休み初日の前日だから寝るには早い。  
だけど・・・それじゃあサンタの邪魔になるから、敢えてもう消灯  
しどくか。

順番でいったら俺は最後になりそうだな。

今年は特に何もお願いしてないからどんなプレゼントを貰えるのか  
楽しみだ。

じやあ待つてるだ、父さん。

布団に潜り込んで少し待つていると、ドアがゆっくり開いた。

今年も父さんがサンタの格好をしてプレゼントを置いていくんだな。  
分かつてはいるが敢えて何も言わない。

寝たふりして起きてるけど、いつもイベントではつっこんだら野  
暮だ。

びつせやるなら楽しみみたいからな。

「・・・？」

かるとい父さん、いやサンタは部屋の電気を点けた。

「おこおこ、何やつてるんだよ父さん…」

「やつぱり起きてたか、異」

「サンタが寝てる子供を起しきやつたらダメだろ…」

「いいんだよ、お前は」

「もしかしてみどりと黄児も起しきしたのか？」

「いいや、あいつらはドアノブに靴下がかかつてた。みどりは毎年お疲れ様。小説も頑張つてね、つていうメモもあつたぞ」

そういうや靴下を用意してなかつたな。言われるまで忘れてた。

「プレゼントは何？」

「ない」

「そりかー無いのかー。いいよこんな時にボケなくて」

「いいや、無い。だつて何がほしいか分からなからな」

しまつた・・・俺はとんでもないミスを犯していらしー。

「じゃあ、あれだ。なんかくれよ」

「前もつて決めといってくれ」

「まだイブだろ？遅くないはずだ」

「悪いな、明日は仕事なんだ。今日しかサンタは出来ない」

そ、そりだつた。父ちゃんの予定は空きが今日じか無かつたんだつけ・・・

参つたな、このまませつかくのチャンスを無駄にするのは嫌だ。

「・・・それ、着てみたいんだけどいいか？」

「ん、サンタの衣装か？」

「ああ。着た事無いから1回着てみたくて」

咄嗟に思いついたのがこれだつた。

クリスマスにしか出来ないといつたらこれしかないのである。

「構わんぞ、ほら」

父さんから借りた真っ赤な服を羽織つた。

サイズが大きくてブカブカだつたけど、意外と悪く無さそうだな。更にズボンと帽子も身につけて、気分は完全にサンタクロースそのものだ。

「似合ひうじやないか、異」

「そ、そうかな？」

「たまにはそういうプレゼントも悪くないだろ」

普通にただ欲しい物を貰つよりも、ひとつひとつ気分を味わうのも面白いかもしない。

子供の夢を背負つて仕事をしてゐる人は、どうにか気分なんだらつ。

「その衣装な、蒼太が作つたんだぞ」

「兄貴が？いつ作ったの？」

「もう結構前だなあ。確か4年前くらいか」

まだ俺が小学生だった頃か。

「サンタになるならこれ着てくれ、つてさ。最初は恥ずかしかったが今は毎年が楽しみだぞ」

その気持ちはちょっと分かるかもしれない。

クリスマスは何だか楽しみだけど、ここ2年くらいはやや気持ちが冷めた気がする。

兄貴はまだ俺と同じ頃も楽しみにしてたんだな。

「うせ毎年やつてくるなら楽しまなくちゃいけないな。

それがプレゼントなら、店で買つ物よりもっと大事な物かもしれない……。

「今よりもっと太ればブカブカじゃなくなるぞ、異」

「お断りします、父上。僕はこれくらいの体型がいいです」

あと1日あるクリスマス、明日が本番なんだ。

どんな過ごし方をしたとしても楽しめるのが一番だよな。

（続く）

## 人物紹介（進藤家）（前書き）

改めて人物紹介します  
今回は進藤家の家族です

## 人物紹介（進藤家）

### ・進藤家のの人達

しんどうあかね  
**進藤紅音**

22歳〇型。長女。ラーメン屋の店員。  
好きな色は赤。ブラウンのスイングボブ。大雑把で樂天的な性格。  
スタイルはいい。

以前髪型を巽に馬鹿にされ、三途の川手前まで連れて行つた事がある。

しんどうそうた  
**進藤蒼太**

20歳大2A型。長男。

好きな色は青。漆黒のさらさらヘア。穏やかで几帳面。酒に弱い。  
頭脳明晰で運動神経も良く、物腰も穏やかで人を引き付ける雰囲気  
がある。

飲酒するとまつたくの別人格を無意識に召喚してしまう。

しんどうみづみ  
**進藤巽**

17歳高2B型。次男。一応本作品の主人公。

好きな色は黒。

時に語り手をさぼる事がある。しばしば敬語になるが、使いどころ  
を間違つてばかりのです。

しんどうみどり  
**進藤みどり**

16歳高1AB型。次女。

好きな色は緑。髪型は黒のセミロング。口数が少なく心配性。バス  
ケ部所属。

学校が巽と同じなので毎朝登校し、部活が無い日は一緒に帰る。

ブラコンで異が好きで、消極的な性格なりに懸命に頑張るが、鈍感な主人公は振り向いてくれないのだ。

進藤黄児  
しんどうじゅうじ

10歳小40型。三男。

好きな色は黄色。脳天氣で考えるのが苦手。遊ぶのと食べることが大好き。だからメタボ気味、いいや立派なメタボリック。歳が離れている紅音に特に可愛がられている。

いつか人々を守るヒーローになるのが夢。

進藤銀太郎  
しんどうぎんたろう

48歳A型。進藤家五人兄弟の父親にして柱。

好きな色は銀色。小説家で普段は書斎に籠もっているので、出番はそれなり。

口数は少ないが話す際に小ボケを挟むお笑い気質で、異にボケの才能を見出だしている。

進藤輝子  
しんどうてる

46歳B型。進藤家五人兄弟の母親にしても一つ一本の柱。

好きな色は金色。明るい性格でお喋りするのが好き。

異を怖がらせた新聞取りのヤクザを成敗してしまった程の力を持つ。でも、普段は決してその力をを見せびらかしたりはしない。使う時は家族に降り掛かる災厄を打ち払う時のみ。

## 25・異のクリスマス

…………あのやあ。

せつかくこっちが楽しもつて気持ちになつたのに、ビリしてなの?  
なんでまだ夕方なのに姉ちゃんがいるんだよ。

我が家で一番アホな進藤紅音こと大雑把なバカがどうして。

「痛っ！姉ちゃん、おでこ叩くなよ！」

「おい異、お前今心の中でバカにしてただる」

「いいえ、してません」

「絶対にウソだね。クリスマスなのに出かける相手がいなくて、家  
で寂しくチキン頬張つてやんのコイツ（笑）、って思つてる」

いや、アホでバカだとは思いました。

かつこわらいだなんて言葉リアルに口に出す人いるんだ。

ブログや掲示板でもあんまり見かけなくなつたのに・・・・

「今日は早かつたのね紅音」

「・・・店長がさ、若い女がクリスマスに遅くまで仕事なんてしき  
てるから、早く上がれって・・・」

「ふうん、そりやあさぞぐさつときただらうな」

「・・・・」

「痛い！やめろ、フォークで刺すな！！」

「お前は私を怒らせた。それが刺された原因だ、進藤異」

いつもの悪ふざけにしてはやや表情が険しく見える。

踏んじやいけない地雷を踏ん付けてしまつたか。これは完全に失敗  
したな。

「遊びに行く相手くらいいるだろって言われたから、頷いた」「偽りを口にするのは良くないと思いますが」「いないと言うのは嫌だったから。あんたには分かんないと思つけど、私にだってプライドがあるのよ・・・」「ポテトかチキンかどっちなんだ」

せっかくボケてやったのに姉ちゃんは反応するビリビリが流しやがった。

父さんは警めてくれるんだぞ。

少しは弟に気遣いくらいしてくれたって・・・

「・・・もうこの際あんたでいいや」「はあ?」「一日でいいから私の彼氏になれ」「おっしゃる意味が分かりかねますが」「言葉の通りだ。ほら、さつさと来い」「な、何すんだよーおい姉ちゃん!」「

姉ちゃんは俺を無理矢理外に連れ出そうとしている。

「夜まで帰らないから、私達!」

そして母さんに向かい不吉な宣告をした。

なんてクリスマスだよ、よりもよつて姉ちゃんなんかと2人で街を歩く羽目に・・・

「たつくん、お待たせ!」

コンビニから出てきた姉ちゃんが今まで聞いた事が無い名前で呼んだので、無視した。

「もう、遅かつたから拗ねてるの?」

隣に座って、買ってきたケーキを差し出してくる。

「はいーあーん」

「いい加減にしてくれよ。何が悲しくて、クリスマスに姉ちゃんにケーキ食わされなきゃならんこりんだ?」

「・・・私だけ虚しつつ。せめて弟を彼氏と思わなきゃやつたらんないよ」

「もう帰ろっぜ。寒こじらせ」

「じゃあこいつしてあつたまればいいじゃん!」

姉ちゃんは俺の左腕に両手を絡ませてきた。  
あつたかいどころか痛い、苦しい、鬱陶しい。

「・・・姉ちゃん、もう気は済んだだろ?」「・・・」

なるほど、不満なのね。

「歩くぞ、たつくよ」

「い、このまま?」

「イヤなの?もしかして私の事嫌いになつた?」「好きになつた事は無、いだだだだ!」

半ば強引に立たされて並んで歩かれる。

はあ・・・毎回姉ちゃんはこんな感じだな。  
何をするにもとにかく自分勝手だ。

「・・・へへ、私達もカップルに見えるよね。他人には姉弟だと分かんないって」

「やうだらうな、きつと」

クリスマススタイルミネーションに彩られた街を、姉ちゃんと一緒に歩く。

どこに行くわけでもなく、ただ歩いていただけだった。

道行くカップルや家族連れはみんな幸せそうに笑っている。

「あ、雪だ」

「本当だ。降るって予報では言つてなかつたのに」

「じゃあ嬉しいサプライズだね」

姉ちゃんの言う通りだ。

・・・雪に見とれるその顔は、弟の McConnell に見ても悪くはない。

まあ、問題は中身だな。

来年は姉ちゃんに幸せと一緒に願う人がいるといいよな。決して口には出さないけど、そつなるのを願つてるぜ。

降り始めた雪は静かに街を白く彩つていた -

（続く）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0460z/>

---

進藤家の人々

2011年12月25日19時53分発行